

**University of Pennsylvania**

---

**From the Selected Works of Cecilia S Seigle Ph.D.**

---

Summer 2012

# 江戸時代女性の噂話 第二部：農村あるいは地方の女性

Cecilia (淑子) S Seigle (瀬川) , Ph.D., *University of Pennsylvania*



Available at: [https://works.bepress.com/cecilia\\_seigle/19/](https://works.bepress.com/cecilia_seigle/19/)

## 江戸時代女性の噂話 第二部：農村あるいは地方の女性

### とんだ災難 1： 重箱が証拠

享保十年頃(1725)の話である。前年の秋に遠江の懸川あたりの町から近くの村へ嫁入った娘が、親の家を二三日訪れるために重箱にご馳走をつめ、着替えの衣類など風呂敷に包んで女中に負わせて山ぎわを歩いて来ると、大神楽の一行に行き合った。このかぐらの連中は七八人いて、あれこれ他人の物を奪い取る事を仕事にしていたのである。彼らは二人の女をおそって、山中の木に縛り付け、持ち物を全部取り上げて立ち去った。

その日暮れ彼らは町のある宿に泊った。彼らがくつろいで茶などたのみ、ご馳走の入った重箱を取り出した時、茶を持って来た宿の亭主はそれを見て、娘の嫁入道具の中の重箱によく似ているので不審に思った。それから何かと気をつけて見ていると、風呂敷の中の着物などもまぎれもない娘の物であった。それでこれはきっと娘の家に人気がないすきをねらって盗んだのだろうと察し、いそいで名主や五人組の者へ相談すると、名主たちは与力や同心を呼んでその宿を取り巻き、一人残らずからめとった。

大神楽の者たちが取調べられて白状したので、宿の亭主たちが急いで野辺へ探しに行くと、もはや娘たちは夜の間に狼に食われて二人の首だけが残っていた。大神楽の一行は皆磔の刑になったそうである。<sup>1</sup>

享保の頃はまだ外歩きが危険で、ちょっと町を離れると、狼や山犬が徘徊していて人間に害を加えたことが随筆に見える。吉原土手などでも人が狼に食い殺された。この話は山の中から更に狼は多かったことだろう。始めの害は大神楽の人間共によって加えられたのだが、泥棒たちが娘と女中を木に縛り付けて放置したために彼女らは惨たらしくも狼に喰い殺された。大神楽の連中が磔刑で罰せられても娘たちは生き返りはしない。哀れな話である。大神楽も皆が皆そんな悪者ではなかっただろうに。かぐらの連中は…「あれこれ他人の物を奪い取る事を仕事にして」いたという言葉は今ならば名誉毀損で訴えられる所だろう。

狼に食われた娘たちの首だけが残っていたというのは実際にあったことを示唆するようだが、狼は常習的に人頭を食べないのだろうか。また泥棒たちは娘たちの着ていた着物も全部はぎ取って行ったのだろうか—でなければ体を食べ尽くす事は出来なかったはずである。何とも残酷きわまる話である。

### とんだ災難 2： 片輪車の罰

信州の某村に片輪車という神様がいます。誰もこの神を見ることを禁じられているので神のお出かけの日には村中門戸を閉じて往来も止め、外出しない方がいい。

或る年、神がお出かけだという日にその村の一人の女が神様のことを知りたいと思ってひそかに障子に穴をあけて見ていると、遙かな所から車がきしる音がして、やがてその家に近付いて来た。女が穴からのぞいていると、車を引く人もいないのに一つだけある車輪が回って車は通り過ぎて行く。その上に一人の美しい女が乗っているのが見えた。

女は車が行ってしまうまで見とどけてから寝室へ帰ってみると、さっきまでそこにいた幼い娘が見えない。這ってどこかに隠れたのかと彼方此方さがしたが何処にもいない。女は、さては神さまを見ることを禁じられていたのに盗み見たので娘を取ってしまわれたのだ、と気がついて深く後悔し、嘆き悲しむ事限りなかった。一二日過ぎたが行方がわからないので、女は思いわびてその神社に詣で、過ちを悔いて一首の歌を詠んだ。

罪科は我にこそあれ小車のやるかたもなき子をなかくしそ

<sup>1</sup> 享保世話, p. 406.

祈り終わって泣く泣く帰ろうとしたとき、娘の声があったので振り返ってみると、社頭に娘が家にいた時のままの様子で泣いている。女は夢かと喜んで娘をかき抱いて家に帰ったという。

和歌には神様の心も和ませる力があつたとは恐れ多い事である。<sup>2</sup>

この話は『諸国百物語』（1677）にも入っている。その本の筋書きは少し違って、片輪車の輪に引きちぎられた人の股がついていた。女房が驚いていると、「いかにそれなる女房、我を見んよりは内にある汝の子を見よ」と諭す声が響き渡った。女はおそろしくなつて部屋へ駆け込むと三つになる子が肩から股まで引き裂かれていて、片脚はどこにもなかつた。あの車にかけられた股はこの子のだったと気がついた女房は嘆き悲しんだけれどもどうする事も出来なかつた。見てはならないものを見たがった人間をいましめた説話であるが子供を犠牲にするとはずいぶん残酷な話である。<sup>3</sup>

『譚海』の話の方は子供が無事だったので信じやすい。紀貫之の『古今和歌集』の序言以来、日本では和歌が人の心を動かす力があることを強調する挿話が多い。そうして人の心だけでなく神様まで動かすのである。それは証明しがたいが、それを信じる事のできる人はますます歌の道にはげんで良い歌を詠んだことだろう。禁を犯した者に与えられる罰はいろいろあるが、とにかく犯した者にとって一番辛い事になって現れるのだろう。此の場合この女性に取つては子供を失う事以上の罰はなかつただろう。『百物語怪談集成』の話の方は残酷すぎて信じ難い。

片輪車というのは何かというと、日本の妖怪の一種で、普通、炎に包まれた車輪一つの牛車に美女か、それとも恐ろしい男が乗って走って来る。そうしてこの話のように、それを見たものは崇られるそうである。これは普通江戸時代にできた怪談だと信じられているらしいが、牛車というのだから平安時代に遡る地方伝説かも知れない。

しかし一方「片輪車」というのはデザインという全然違った世界で大活躍をしているのである。江戸時代の着物のデザインや工芸品の世界での片輪車は昔からある源氏車の下半分に、水あるいは波をあしらったものである。これは平安時代、牛車の車輪は木製なので、使われない時空気の乾燥で車が割れてしまうのを避けるために、小川や池に浸しておいた。それを日常品のデザインとして常習的に使つたという風流な習慣であつて、おそろしい神様とは全然関係がない。實に優雅な美しい創造品である。

### とんだ災難 3: おそろしい女

槍術指南の吉田某が語つた話である。最近吉田は上野国生まれの十八、九の柔和そうな女性を雇つた。しかし彼女が江戸に出て来る途中で起つた話を聞いておどろいた。その女は故郷で隠し夫をこしらえたのだが、その男が江戸へ出たと聞いて、親元を逃げ出して夫の後を追つて来た。風呂敷に着替えと鏡を一面包んだだけで、闇にまぎれて家を出て夜通し歩いた。途中どのあたりだったのか盗賊が現れて、風呂敷包みと着ている着物を全部渡せという。女は「包みは上げますが着物は女のものですからどうぞ御許し下さい」とたのむと何と思つたのか盗賊は許してくれた。

女は少しばかり歩いてから急に盗賊のところへ引き返して来て言つた。「お願いがあります。風呂敷の中にちいさい鏡がひとつ入っています。衣類は差し上げますが鏡は親の形見ですから失うのは忍びがたいのです。あなたが持っていて売つても何ほどのお金にもならない物ですからどうぞ返してください。」すると盗賊は親の形見という言葉に動かされたのかそれを返してくれた。女は厚く礼を言つたが、盗賊が風呂敷包みを結ぶ為にかがみ込んだとき、その鏡で力まかせに彼の眉間を打つた。彼があつてと言って手を上げる所をたたみかけて打ちまくつたので盗賊は倒れてしまった。そこで女は包みを取り返して足にまかせて江戸へ出たのである。

吉田はその話を聞いて、「あつぱれ女豪傑だ。私は長年武芸の師範をしているが、そんな手柄話を聞いた事はない」と言つて雇う事にしたのである。ところが女は調子に乗つて「私は在所を出たとき、鎌を一丁もつて来ようと思つていたのですが、あまり急いだので忘れまして」と言う。「それは道中の用心のためか」と訊くと、「いいえ、後から親たちが追いかけて来るのであれば脚をなぎ倒してやろ

<sup>2</sup> 譚海、p. 227-228。

<sup>3</sup> 百物語怪談集成 2:28-29。

うと思ひまして」と言ったので、吉田は呆れてしまつて恐ろしい心底の者だと見限り、早速首にした、と語つた。<sup>4</sup>

これは何ともこっけいな話である。第一盗賊は人が良すぎる。相当女に甘い盗賊だったのでらう。女の身だから着物なしでは恥ずかしいと言へば、よしよし、と許してやる。わざわざ引返して来て親の形見の鏡だから、というところかそうかと同情して返してやる。そんなに大事な形見の品ならば、はじめから「これは差し上げられません、着物を取られてもこの鏡は親の形見だから私にとって大事な物です」とでも言つたはずである。そのウソを見抜けなかつたのは間抜けな強盗である。

今の世ではあまり聞かないが、江戸時代には大力で有名になつた女が何人かいた。(町の女たち、参照)しかしそれらの女性でも親のすねを鎌でなぎ倒すようなモーレツな女ではなかつただろう。だから此の場合、槍術指南の吉田先生が折角やとつた大力女を即時解雇したのは正当な自己防衛、あるいは危険予防手段だつたと思われる。こんな女はいつ雇用主の寝首を搔きに来るか知れたものではない。しかし親孝行一筋の江戸時代に親の脚を鎌でなぎ倒してやろうという蓄気のある女がいたとは珍しい。

#### とんだ災難 4: トカゲ入昼飯

ある人の話によると、鳥見という係の五人の役人が田舎へ行つた時、村の庄屋の宅で昼食を摂つたのだが、その飯を食べると五人ともたちまち死んでしまつたという。一体どういうわけかと取り調べると、飯の中にトカゲと云う虫がいたのだ。飯をめし櫃にうつす時、上から落ちたものと思われる。其の飯を炊いたのは、十七、八の女だつた。この女に罪はなかつたのだが、結果として五人の御家人を殺したという理由で処刑された。考えれば、毒虫が飯器にはいつたことも知らずにいたのは、小さなことではない。迂闊の至りといえる。<sup>5</sup>

本当に犯罪を犯したわけでもないのに死刑に処せられた若い女性の話である。江戸時代にはよくそう言う事があつた。現代の法廷では動機という事が追求されるが、徳川の世の中では結果の重要性を見る事が第一だつたという例証の一つである。動機も意図もない粗忽なだけの過ちなのに、極刑に処せられたのだから正しい判決ではないが、將軍の小役人が五人も死ねば処刑はまぬがれなかつたのだらう。

それにしてもトカゲが毒虫だというのは知らなかつたが、毒をもっているトカゲはたしかにいるのである。『寝ぬ夜のすさび』(片山賢)によると彼の故郷ではそれを青砥蔭と呼ぶそうである。<sup>6</sup>だが、その毒はあまり強くないという。下あごにある毒線から分泌するもので、強くないのみならず有用な分泌物らしくて、2003年にトカゲの毒は糖尿病に有効である事が発表された。しかしそれはこの噂話と関係のない事で、要は白い御飯の中に落ちたトカゲを五人共食べてしまつたというのである。誰もそれに気がつかなかつたというのは信じがたい。それとも熱い飯の中に落ちて溶けて固形でなくなつたのだらうか。どちらにしても気味の悪い話で、考えただけで食慾がなくなる。

#### とんだ災難 5: 地獄から牡丹餅

文化六年(1809)、相州西ヶ原村(今の北区武州の誤)の百姓女が、元つとめていた屋敷へ来てこの話をしたそうだ。その村に夫に死に遅れ子供もいない老婆がいた。

ある時その老女に思いがけなく無尽があたつて金三十両という大金が手に入った。女一人なので彼女はそれを本家に持つて行って預けておいた。狭い村だから話はぱつと広がつて老婆が三十両を得たことはたちまち有名になつた。

すると村の悪い若者がそれをふんだくる事を思いついて六人集まつてその方法について相談した。その結果彼らは顔に墨や朱をぬり頭巾をかぶつて老婆の所へ押し込んだ。「金を出せ」と脅すと、老婆はたいして驚く様子もなく、「たしかに金はもらつたけれどもそれは本家にあずけてしまつた」と本当

<sup>4</sup> 耳袋 2:241-242。

<sup>5</sup> 春波楼筆記、p. 17。

<sup>6</sup> 寝ぬ夜のすさび、p. 246。

のことを言った。「外にも金があるはずだ」とさらに責めると、「何ともありません。見たらわかるでしょう、こんなあばらやだから探してごらん」というので盗賊たちはくまなく探したが何もない。

「それでは腹が減ったから何か食わせろ。」

「私一人だからご馳走するものもないけれど、先程本家からもらったぼた餅が仏前に供えてあるからそれでよかったらお上がり」と老婆がいうので、泥棒たちは喜んで、十四か十五あった牡丹餅を六人で残らず食べてしまった。すると間もなく彼らは七転八倒して苦しみ始めた。媼も驚いて近所に知らせたので村人たちが来てみると六人とも死んでいた。その男たちのかぶり物を取り墨や朱を洗い落とすとどれも顔見知りの村の者だった。

さて毒入りの牡丹餅を送ったのは誰か？本家の誰かのしわざで、欲心から老女を殺す企みだったのか、又は本家の主人は潔白で他の悪者が毒を盛ったのか、仔細はわからなかったがいずれは公辺でお調べがあるだろう、と百姓女は言ったそうだ。<sup>7</sup>

こういう簡単で短い因果応報の話は小気味よい。しかし取りそこなった三十両のために六人も死んでしまったとは過剰な罰である。この老婆がたんたんとして金を本家に預け、何もしらずに毒入りの牡丹餅を泥棒たちに食べさせたのは、もともと慾のない正直な人だったからである。普通の人（たとえばかく言う私）なら折角もらった牡丹餅だし、牡丹餅というものは一つ目は美味しいと思うから、泥棒たちと一緒に一つ食べて死んでいただろう。食いしん坊の為にそこまで罰せられればいい面の皮である。しかし牡丹餅に毒を盛った人も馬鹿である。調べればすぐにわかってしまう事なのに、昔も今も金銭に対する慾で罪を犯す人々は後を絶たない。

## とんだ災難 6: 姑獲鳥（うぶめ）の妖怪

著者の友人福井某氏は君命で、ある時豊後の玉木という田舎へ行った。目的は鳥を射つことだったが雪みぞれの降る堪え難いほど寒い日だった。暮れ方に鉄砲を射ちしまい、名主の家で夕飯をすませたあとお城まで四里の道を帰って行った。城下近くの、右側は寺で卒塔婆のたっている淋しい所まで来ると、空は晴れて大きい梢から月明かりがさし、みぞれの上にきらめいて風情のある景色であった。その坂を上って行くとなの方からひどく泣きながらおりて来る女がいた。福井翁が思ったことは、此の頃この界限に姑獲鳥（うぶめ）という化物が出て人を驚かすということだが、化物はそうたやすく出るものではない。多分盗賊などが化けて人を悩ませているのだろう。どちらにしても絡めとって御城下の噂をとめよう、と思って崖の脇に隠れて待っていると、赤裸の若い女が両手で顔をおさえて泣きながら前を通る。福井氏が躍り出て腕をとってねじ伏せると女は「ゆるして下さい」と震えおななしている。

「お前は何者だ。なぜこんな深夜にこんな姿でうろつくのだ。妖怪だろうが何だろうが実の正体を早くあらわせ」と言うと彼女は答えた。

「私は御城の佐藤主税どの組の足軽の妻でございますが、此の下で豊後絞りを仕事にする弥右衛門は私の親で重い病気にかかっているのので看病のために親の家へ参りました。医師の所へ明日の薬を取りに行つて帰る山道で大男が出て来てむりやりに着物をはぎ取つてしまい、命はからくも助かつて今帰る所です」と言った。

「それはかわいそうだ。その盗人はどっちの方へ行ったのか。時間はだいぶ立ったのか。でなければ取り戻してやるぞ」と言うと女はたいへん喜んで「男は右の山の中に入りました。まだ遠くまでは行ってないでしょう」と答えた。福井氏は「寒いだろうからこれを着なさい」と言って上着をぬいで彼女に着せ「帰つて来るまでどこにも行かないように」と指示して急いで坂を走り登った。左側は逃げ場のない海岸の崖道なので必ず見つかるだろうと登って行くと月影にちらちらと人が見えた。急いで追いかけて行くとそれは大の男だった。

「お前は先程女の着物をはぎ取つただろう。それを返せ」と叫ぶとかなわないと思ったのか帯で結わえた着物を投げ出したがそれには目を止めず、刀を引き抜いて打ちかかり、肩先を斬つてさらに切り払うとうんと言つて倒れた。それを捨てておいて衣類を持ってもとの所へ帰り女に着せると、彼女は物も言わず、手を合わせて伏し拝んだ。

<sup>7</sup> 耳袋, 2:250-251。

ついでにお前の宿まで送ってやろうと言って連れて行くと、家にはいるや否や女はわっと泣き出した。近所の者たちが五六人集まって女の帰りが遅いのを詮議していたので、これはお前の娘か、と聞くと一人が「そうです。どなたですか、こちらにお入りください」と言ったけれど、福井氏はただ、「たしかに渡したぞ」と言って出てしまった。娘は物も言えなかったのか何も説明しなかったので、その人たちはただ道連れに送って来たのだろうと思ったものか、いい加減な挨拶だった。

こういう事件があったので福井氏がお城の門に帰り着いたのは午前二時ごろだった。

翌日、その娘の親類たちから夜前、このようなことがございまして、とうったえ出て、「たしかに御城内のお侍だろうと存じますが、取り紛れてお名前もうかがわず、たいへん失礼をいたしました」ということで、午前二時頃に門に入ったのは誰かという詮議があり、福井氏の手柄はかくれなくなった。殿も浅からず感心なされた。死んだ盗人の住処をさがしあてて取り調べると日頃盗んでいたいろいろの物が全部出て来た。中には家中の侍が拝領の刀を盗まれて訴えも出さずに置いたのがばれたりした。その盗人はもと家中の草履取りだったのが落ちぶれて浅ましい悪事を働いていたのである。その後はこのあたりの妖怪の事件はなくなったということである。これは福井氏から直接聞いた話である。<sup>8</sup>

これは実話であろう。平秩東作は友人の福井氏から直接聞いた話だと言っているだけではなく、そんな不思議な事があるものかと思わせるような奇怪な要素は少しもない。女が真っ裸で逃げて来たというのが少し刺激的だがそれも着物を全部はぎ取られればそうなるより他はない。福井氏が女を助け何の説明もしないで帰って来たのもいさぎよく気持ちがいい。これで城下に 姑獲鳥（うぶめ）という化物が出て人を驚かすという噂の正体がわかったのだが、此の話では、なぜ盗賊がうぶめというあまり馴染みのない怪鳥と結びつけられたのかわからない。以前に襲われた女性が子供を連れていたのか。その説明はない。しかし説明がないことによってこれは実話だろうと思わせる。

調べてみると、産女、姑獲鳥という日本の妖怪はわりと古くから信じられていた存在らしく、妊婦が亡くなった時埋葬すると「産女」という妖怪になると信じられていたそうである。その為、もし妊婦が子供を生まずに死んだ場合、腹から胎児を取り出して母親に抱かせて一緒に葬る習慣があったそうである。もし胎児を取り出せなければ人形を抱かせて納棺する習慣もあったという。それとともに胎児を生めないで死んでしまった女は子供への執着のために変化になって子供を抱いて夜歩き回ると信じられていた。ある鳥の声が子供の泣く声に似ているのか、その鳥をうぶめと呼んだらしい。

一方、姑獲鳥（うぶめ）という鳥は子供を抱いたり連れだしたりして歩いている女を追いかけて子供を奪おうとすると言う言い伝えもあるそうである。

## 殺された美人

常陸の麻生の里から小道を九里ほど行くと、七又と呼ばれる村がある。四方は豊かな広野である。左右には松の大木が茂っていて、向かいには富士がすそを引き、右には筑波山がそびえ、外山がいくつも連なって、画に描いた美景を見るような気持ちになる。

ある時一人の武士が夜中一時ごろにその村を歩いて来ると、一町くらい先にたいへん臆たけた上品な様子の女が美しい衣裳の上に花やかな帯をしどけなく結んだ姿で歩いて来るのが見えた。するとまだ近くにこない先から女はなよやかな声をかけた。

「あなた様はどちらへおいでなのでしょう、私はこの辺に住むものでございまして、麻生へ参ろうと存じまして出て参りましたのに、道を間違えて、連れて来た従者にも別れてしまったので、夜が更けるにつれて恐ろしくてたまりません。お助け下さったら御恩は決してわすれません」といいながら近寄って来た。

武士は「では一緒に連れて行ってあげよう」と寄りそって道を歩き始めた。その途中で男がなにかとやさしく言い寄ると、女は満更ではない様子で、媚をみせるその顔には何ともいえない愛嬌があった。しかしある所まで来ると、男は急に女の腕をしたたかに捕らえて、腰の刀を引き抜いて、胸のあたりを手さぐりに力の限り刺し貫いた。女はあっと言ったきり松の根元にうつぶせに倒れた。その武士は血にまみれた刀を草の茂みに通して血を大様にぬぐいとり、なんでもなかったかのようにのどかに歩いて帰って行った。

<sup>8</sup> 怪談老の杖 p. 43 - 45

武士は翌朝早くから友達の所へ行って昨夜あったことを物語ったので、人々が驚いてその場所に行ってみると、一体何年生きたのかと驚くような、藁のようにふさふさと長い毛の老狸が死んでいた。後にある人が狸を殺した武士に尋ねた。

「こんどはあっぱれなお手柄でしたが、それはひどく危ない事だったと思います。殺したのが本当の人間的女だったらたいへんな間違いを犯した事になったでしょう。」

すると武士が答えた。「そんな事を知らずに殺すわけがありません。もとより夜空は大変暗かったのです。それなのに、まだ相当先から歩いて来る女の美しい顔や華やかな着物の色、帯の清らかさまで、鮮やかに見えたのです。それを怪しいと思わなければ世の中に怪しいことなどないでしょう。だからこそ斬って捨てたのです」と語ったという。武士はこうあるべきだとその国の人が語ってくれたので、その武士の名前を訊ねると「手賀という家柄の人でした」と答えた。それではこれも歌志久だったのだろう、と人々は言い合った。<sup>9</sup>

狐や狸に化かされた噂話は非常に多くてこれなど典型的な話である。もちろん狐や狸の住んでいない町中ではそんな話はあまりないが、山や森に囲まれた田舎では夜は真つ暗闇で、狐狸妖怪に化かされ話は根強く語り伝えられた。科学的にそういう現象はあり得ないのだが、狐や狸の伝承は今でも地方では伝わっているようだ。しかしどの話も狐や狸が美しい女に化けたという話ばかりで、男に化けたという話はなかったようである。これは女より男の方がうっかり者か、自惚れていて化かされやすいということだろうか。

歌志久は麻生藩士の手賀弥太郎。鹿都部真顔の弟子で国字垣歌志久（かながき-かしく）という名前で狂歌をよんだ人であるが、なぜ人々が「手賀という家柄の人」と聞いて「これも歌志久だったのだろう」ときめたのかわからない。狂歌師として国字垣連という一派をたてて有名だったのだが武力の方でも相当優れていたのだと思われる。でなければ「これも歌志久」という言葉が意味をなさない。

## 狐の恨み

播州のどこかの村で女中が昼飯の時、朝のうち田圃で裸足で働いたので、泥にまみれた足を盥の湯水で洗ってそれを捨てようとして垣根に来た。彼女はその垣根の下で狐が眠っているのを知らなかったので何心なく盥の湯をそこへざっと流した。狐は驚いて飛び起き、顧みて女中の顔をにらんだが女中はそれに気がつかなかった。

その夜女中は寝ていて口走った。「俺が昼寝をしている時汚い足をすすいだ不浄の水を俺にぶっかけたな」と怒り声を出して徹夜狂い回った。その様子が非常におそろしかったので家人が心配して朝になって村の僧を呼んで来た。僧は女中（狐）にむかって言った。

「お前が昼寝をしたのはお前の宿ではない。女中はもとよりお前がそこに寝ていると知って水をそそいだのではない。知らずに犯した過ちを咎めるのは、咎める方の過ちである。人間は知らないでおかした事は咎めない。それがお前が畜生である所以なのだ。」と諭した。狐は黙って自分に言った。人間は人が知らずに犯した過ちは過ちとは考えないのか、始めてこれを知った。畜生の愚かさは憐れむべきだ。そうして狐は黙って去って行った。<sup>10</sup>

これは狐をさとしていたのではなく人間に人が知らずにした事をむやみに咎めるのは狐や犬と同じだと説教しているのだろう。そうして女中はどうなったのか著者が何も言っていないのは言いたいことが女中とは関係のないことだからだろう。ここでは狐を anthropomofy (擬人化)しているが、狐は黙って去ったあと、その教訓が役に立ったのだろうか。著者はさすがに、狐が図らずも自分が巻き込まれていたドラマについて後で考えたとは言っていない。

## 百姓姉妹の敵討

<sup>9</sup> 猿著聞集、p. 450-451。

<sup>10</sup> 膽大小心録、p. 361。

松平（伊達）陸奥守の家老、片倉小十郎の知行内の百姓に四郎左衛門という者がいた。伊達家の家老片倉殿の剣術の師は田中志摩という人だったが、享保三年(1718)のある日百姓四郎左衛門が田中に行き会い、あやまって供回りの列を乱したので田中志摩は四郎左衛門を斬り殺してしまった。

四郎左衛門には十一歳と八歳になる二人の娘がいた。娘たちは敵討ちの志を持って家を引揚げて仙台へ行き、伊達陸奥守の剣道の師匠の滝本伝八郎の家へ奉公人として入った。

二人の娘はひそかに先生の道場での稽古を観察し、いろいろと剣術の修練を習い覚えた。ある日滝本は女部屋から木刀の音とかけ声がしきりに聞こえて来るのを不思議に思っただけでみると、二人の少女が剣術の稽古をしているのであった。滝本が理由を訊くと姉妹は父が殺されたいきさつと敵討ちの決意を述べた。滝本は感心して其後二人を教え導き、色々な奥義を授けることにした。

数年たって滝本は藩主伊達陸奥守に、自分の家の幼い女中たちのけなげな志を助けてやりたい気持ちを伝えてその許しを願った。陸奥守が許可を与えたので、滝本は娘たちにそのことを知らせ、仇の田中志摩にもその事を伝えた。公に仙台の白鳥大明神の社前の宮の町という所に矢来を作られ、勝負が行われる事が公表された。仙台公はその日警護検分のために家臣を派遣した。

敵討ちの日になると大勢の見物が大明神の矢来の廻りに集まり、勝負が始まった。姉妹と田中志摩は数時間に渡って切り合ったが中々勝敗は決まらなかった。二人の姉妹はかわるがわる田中と渡り合っているうちに、妹がとうとう田中を袈裟がけに斬りつけた。その時彼女も傷を負ったのだが、姉がすぐに走りよって妹に代わり田中にとどめを刺した。

伊達の殿様は大変御機嫌よく、姉妹を家中で養うよう仰せられた。しかし姉妹はそれを固くお断りし、「私たちは目的の父の仇を討つ事を許され、おかげで志を果たしました。人を殺した罪によるお仕置きはどのようにも受ける覚悟でございます」と申し上げたので皆々さらに感じ入った。滝本は姉妹に向かい、委細を言い聞かせ、太守の思し召しに背くべきではないと諭した。さらに「お前たちは私にも剣術の指南を受けた恩があるはずだ、私の志にも背くべきではない」と言ったので姉妹は納得した。その決断によって姉妹は御家老三万石伊達阿波殿へ引き取られた。姉は当年十六歳。十三歳になる妹は大小路権九郎に引き取られたという話である。<sup>11</sup>

この話は月堂の保証にもかかわらず多分に疑わしい。奥州一の大大名、享保の頃の藩主といえは有名な伊達吉村であるが、その人に剣術指南をする人といえは非常な名家であろう。身寄りもない田舎そだちの小娘二人が下働きとしてでも、そんな身分違いの武家に簡単に入れるはずはない。もし事実だとすると二人に有力な親類、知人、または保護者がいて、その人の世話で子供でもできるごく簡単な仕事のために入れて貰えたのだろう。姉妹の身寄りについては何の説明もない。

一方討たれた田中は名だたる伊達家累代の家老片倉殿の剣術指南役である。そんな達人が五年ばかり剣術のけいこをした、まだ子供である少女たちに討たれるはずがない。実際に此の話に少しでも似た事件が起ったのなら、色々と複雑な経路を経て敵討ちに至ったにちがいない。

伊達公は自分の剣術指南の滝本が保護している娘たちだから御機嫌はよかつたろうけれど、片倉小十郎は自分の師の田中志摩を殺されて怒らなかつたのだろうか。片倉小十郎は吉村侯にご無理ごもつもの家老だったとは思えないのだが。しかし史実ではないにしても、江戸時代の敵討ちとしては絵に描いたような理想的な経過で姉妹の志が果たせたのだからおめでたい話ではある。だから人々は講談のつもりで語り伝えたことだろう。しかし始めはまだ十一歳と八歳にしかならない百姓の娘たちが敵討ちをする決心をしたというのが不思議である。これはよほど敵討ちという観念が行き渡っていたとしか思えない。

「八幡の妻仇」で述べたように、敵討ちをいうものは復讐の倫理的な理由と関係なく、日本の封建的心理と使命感によって義務付けられていたので、この姉妹も幼年にもかかわらず、というより幼年だからこそこんな向こう見ずの決心を下のだろう。しかしその結果として、この場合田中に子供がいたとすればその子供が二人の姉妹を仇討つ決心をしたはずである。そうして何世代も男女の殺し合いが続いたはずである。物騒な、今日の常識では考えられない人道であった。

## 色好みの老女

<sup>11</sup> 月堂見聞集 中：248-249。



下野の國の渡辺数守の家の近くに年来やもめになって住んでいる女がいた。年は六十ばかりだったが、大変な色好みで、長くもない髪をせっせと櫛けづり、相当に汚ない顔を皺など見えないようにまっ白に厚く塗りたくり、口紅もていねいに塗り立てて、立派な衣裳に身を包んで出て来る様子は十二月の風の月夜にお化けを見るように背筋に寒気がして、ものすごいばかりだった。ある日この女が数守の家に来て、誰が描いたのか、諏訪湖の氷の上を旅人が行き交う様子を描いた絵を見せて、これに歌を詠んで書いてください、と言った。彼女が何を企んでいるのかわからなかったが、数守は筆をとって、

霜ふりて海つらあつくこおりけりそれから波のしわもかくれつ  
と書いてやった。女は始めはよろこんでいる風だったが、やっと気がついたのだろう、画をそこへ投げ捨てて帰ってしまい、その後は二度と来なかった。<sup>12</sup>

『伊勢物語』の九十九髪のお婆を思い出す話である。江戸時代の人達が全表面識のない画家や書家の所へ行って何か書いてもらう話は方々にある。詩人や歌人や俳句の宗匠にもよく頼んでいる。今でも日本ではそうしているのだろうかといつも驚く。新しく歌を詠んで書いてもらうというのは特に大胆な要求である。字だけでなく、歌まで創作してくれ、というのだから特別の知己か、この人になれば書いてあげてもいい、と思わせる人にしか書いてあげなかったのではないかと思う。この厚化粧の老女は普段から噂にのぼっていたのだろう。数守はこの際とばかり、からかいかいましめの気持ちでそんな歌を書いたのではないだろうか。特別の知己や親類や妻の親友などにたのまれたのなら、とてもそんな残酷な歌は書かなかっただろう。その女は歌の意味をさとした時点で奮然と色紙を放り出して帰ってしまったというのだから、この皮肉な歌は十分な効果を発揮したといわなければならない。

日本は敬老の國であるのに、老婆はあちこちで非難の的になり噂を立てられている。敬老の國であったからこそ、正当な理由がなければ爪弾きされるはずはなかった。統計的に女性の方が長生きするので老爺よりも老婆の方が多かったのは当然だが、その人たちが世の中でいやがられる存在になっていたとは情けないことである。

### ふんどし手拭

常陸の國の青木長人が出羽の國へ行つた。山形から十八里程へだたつた所に上の山という温泉がある。ある日の昼ごろ長人は親しい人たちを三人誘って入浴に行った。すると湯女が一人汚らしい手拭いを肩に引っ掛けてやって来た。顔を洗ったり拭いたりしている人々がその手拭いを見ると紐がついているので「越中という下帯(褌)だろう」と言うと、女は顔を赤らめて恥じた様子だった。

折からはかの女が、清潔な手拭いを持って来て、着物をぬいで湯にはいろいろとした。するとさっきの女がなにげない様子で「手拭いをぬらしてしまうより、もうぬれているのを貸して上げよう」と言った。今来た女はよろこんで、それじゃあ、と言って湯にはいろいろとしたが、紐がついているのを見てひどく腹をたてて「なぜこんな物をくれた、ひどいことをするじゃないか」と言って叩こうとした。相手の女が叩かせまいとして走り出すと、彼女は逃がすまいとして追いかけて始めた。おたがいに逃げよう逃がすまいとそこら中走り回り、かくすべき所さえおっぴろげて駆け回つた様子は呆れるばかりだった。人々はおかしさに堪えかねてどっと笑い出した。長人はすかさず、

いつくしきかおのみなどの汐干がりはまぐりふたつひろいけるかな  
と詠んだので、女二人も気がついて恥ずかしさにうつぶして起き上がれないでいた。見物人たちは笑いこぼした事だった。騒々しい女たちもいるものだ。<sup>13</sup>

これは作り話にしてはあまりばかばかしい話なので本当に起つたことだろう。それでなければこんな狂歌が生まれるはずはない。あられもない姿で走り回つたというのはその女たちがやはり山里の湯女で身だしなみに気をつける心構えや教養がなかったからだろう。そうして二人の女達は喧嘩友達か、よく知りあつた傍輩だったのだろう。みっともない、という傍ら、開放的な光景に人々がよろこんだの

<sup>12</sup> 猿著聞集、p. 475。

<sup>13</sup> 猿著聞集、p. 480。

はたしかである。露天風呂で混浴というのは今はもうないのだろうが野趣のある話である。だからよけいに信じられる。駆け回っているのが目に見えるような話である。

### とんだ浮気

昔、人妻がいた。夫は外ごころが多くて夜毎に何処へとも知れず浮かれ歩いていた。けれどもこの妻はすこしも恨む様子はなく、着物、帯、夫の一切の身支度を用意して出してやるのだった。

あまり文句が出ないので、男はもしや妻に二心がある為に自分を毎晩出してくれるのではないか、恋人がいるのではないかと、思いついた。とたんに心配になって自分の女の所へ行くふりをして中庭の厠の中にかくれて様子を見ていた。女はそんな事とは露知らず、いそいそと夫を出してやった後、女中を呼んでその耳に何かささやき、女中はかしこまって出て行った。

やっぱりそうだ、浮気をしているのだ、ではすっぱぬいてやろう、と男は熱くなって隠れていると、しばらくして下女の後にくっついて男が入って来た。見ると出入りの八百屋の爺である。物を入れた籠を脇にはさんでつつと入って来た。何と浅ましいことだ、年は六十を越えて歯は抜け落ちている、頭は禿げている、鼻水は垂れている、こんな奴と取りかえられていいものか、と男は口惜しくて、どうしてやろうかと思ひながら我慢して見守っていると、恋をするのではなくて、妻は台所で、それを焚きなさい、あそこに炭をつぎなさい、と口やかましくせきたてているのだった。その間まな板包丁の音も気ぜわしく、多くの鍋はもうもうと湯煙を立たせ、美味しそうな匂いは夫の隠れている所まで流れて来た。食べ物の支度ができると、妻は誇らしそうに飯べらを取って飯を大盛りにして食い始めた。その有様はあまりにも飾りなくて浅ましい位だったから、ひょっとその場に出て行く事さえ味気なく思われた。しかし「風吹けばおきつしらなみ」の上に出られてはたまらない、と心づいたのでその後は夜毎に出歩くことをやめてしまった。<sup>14</sup>

『伊勢物語』のもじり文体でそのなかでもとくに有名な、毎夜出歩く夫の身を案じて

風吹けば沖つ白波たつた山よはにや君がひとりこゆらむ

の名歌を詠んだ貞節な妻の物語のパロディである。普段はしかめっ面の上田秋成が、こんなふざけた話を書いたのがおもしろい。主人公の妻は始めは『伊勢』の貞淑なしとやかな女とよく似ているが、夫が出て行ったとたんに豹変して、食い気の旺盛に発達した女になるのでその変身ぶりがこの上なくおかしい。上田秋成は女性を皮肉るつもりでこれを書いたのだろうが、目的や過程は何にせよ、事態がめでたしめでたしで終わっているのによけいにおもしろい。

### なじょだ豆

下働きの女が下郎男を呼んで豆を買いたいと言うと、下男が「なじょだ豆だむし」と言った。女は豆の名前なのだと思って「そうよ、そのなじょだ豆が欲しいのよ」と言うと、男はひどく疑わしく思っている様子であった。そばに、此の國の言葉をもう覚えた人がいて、笑いながら「何の豆がほしいのですか、と聞いているのですよ」と言ったのでお互いに大笑いして、腹わたがよじれて切れそうだったそうだ。「なじょ」というのは「何条」がなまったのだろう。「むし」というのは此の國の言葉で、言葉のおしまいによくつける語尾で別に意味はない。いつか、農家の子供が稲田に出ていたのに何をしているのかと訊くと「稲刈りだむし」と答えたものだ。<sup>15</sup>

きびしい寛政改革を実行した首席老中松平定信が書き留めたおもしろい話である。松平定信がただ厳格なばかりの儒教と法律の塊ではなくて、気楽な随筆を書いたことは読者をほっとさせる。

今でこそ東京付近の言葉は標準語だと思われているが、昔は江戸語も方言だった。全国から集まって来た人々の言葉が混じり合いあちこち摺り合い磨かれたりけずられたりして標準語が出来た。しかし

<sup>14</sup> 癩癩談 p. 430-431。

<sup>15</sup> 関の秋風、P. 369-370。

江戸の人たちは地方へ行くと一応「なじょだむし」のような明らかな特有方言に対して優越感を持っていたようだ。もっと近代になると『なむし』とか「なもし」という方言は夏目漱石の『坊ちゃん』の中でさんざんからかわれている。

『日本方言大辞典』によると、「もし」「むし」あるいは「なもし」「なむし」は文末に用いて軽く感情を添える言葉であるとして、色んな地方例が挙げられている。山形市、岩手県気仙郡、群馬県、などの東北と、四国の愛媛県温泉郡というかけはなれた地方で使われているようである。どちらにしても、『…だなあ』『そうじゃあないか、もし』という気持ちの話し言葉であるらしい。または『そうじゃありませんか、もし』とか「きれいですねえ、もし」という呼びかけなのかもしれない。

「なじょ」というのはたしかに定信が言ったように『何条』から来た言葉だと思う。この下働きの女は定信公の台所に雇われていた女性だろうか。そんな下位の話が幕府でもっとも権威のあった老中の耳に届いたのは、やはり他の使用人たちの口を通してであろう。それらの人々も厳格なご主人だが、くだけた所がある人だとよく知っていたのだろう。

## 孝女

日本や中国には便利な漢字の組み合わせで孝女という言葉がある。そうしてそんな熟語が必要なくらい孝女や孝子はいくらでもいたのである。勿論これも儒教普及教育の賜物で他の時代にはそのコンセプトはあっても孝女という言葉がそれほど使われたとは思えない。さらに他の國にこんな便利な熟語があったかどうかわからない。外国語辞書で調べようと思いつつまだそれをし得ないでいる。

### 孝女 1：少女狼を殺す

石見の國浜田に悪い狼がいて狂い歩き、人々を悩ませていたので、夕暮れには人の往来は稀だった。ある夜酒飲みの百姓男が十二三になる自分の娘に酒を買って来いといいつけて外へ出した。女の子は村の酒屋まで行って酒を買って、帰り道をとぼとぼ歩いていると、いきなり狼が現れた。少女は逃げようとして酒の壺を持った手を後ろにかくして走り出したが、狼は少女を食い殺そうと飛びかかった。両方の勢いで徳利が狼の口に深く入って出なくなり、狼はのたうち回り、たけび狂って死んでしまった。少女は酒の器を狼に取られて家に帰られもせず、父親に叱られると思ったのだろう、泣いていたのをその辺の人たちが聞きつけて家に送り届けたということだ。これも神の助けだったのだろう。<sup>16</sup>

このように奇跡的なことが起こったのかどうか、その詳細は信じがたい。女の子が酒の壺を後ろにまわして走ったというのは間違っていると思う。第一両手を後ろへまわして物を持って走る事は非常に不自然で難しい。それに酒は父親の命令でなければ金を出して買ったのだから、壺を大事に前にしっかり抱えるのが普通ではないだろう。酒の入った重い壺を後ろに隠し持って走るなど道理に合わないし、難しくてもできることではない。狼は後ろから追いかけたのだから、酒壺がどうして狼の口に入ったかを説明するためにこんな無理な姿勢を考えたのかも知れない。それに酒壺が口にはまったとしても、狼は鼻から息が出来たのだから窒息死という事はなかったはずである。酒が口から咽や鼻に溢れて窒息したのだろうか。狼も多分酒が好きだったから幸福な死というべきである。

神の助けを持ち出すのはその頃として当然である。しかしたいていこういう時には何かの結末があって、極道のおやじが、娘が首尾よく狼を殺してくれたこと誉めずに、酒をなくしたことを叱りつけるとか、一方村人たちは狼を殺してくれた娘に感謝して役所に届け出て、娘は褒美をもらった、というような情景が繰り広げられはすなのだが、これは何とも言っていないので物足りない。噂を聞いた人も詳細聞いてはいなかったのだろう。

### 孝女 2：板ばさみ

播磨の國赤穂城下の木津村に孝女がいた。早くから夫を失い極めて貧しかったが、二人の子を立派に育て、重い病気で寝込んでいる八十余の姑によくつかえて申し分がなかった。

<sup>16</sup> 傍廂、p. 25。

ある時子供の一人が他人の持ち山で柴を取ったとあってその村の人々がその子を縛りつけ、殺すぞと脅かした。その事が孝女の村に伝えられたので村長が家に来た。村長は「私が行って詫げるからお前も行きなさい、でなければ許してはくれないだろう」と云った。孝女は泣いて「いいえ私は参りません。お願いですから村長さんがいらして何とかして子供を助けてやってください」という。

「お前は自分の子の命を助けたくないのか」と村長がなじると、彼女は涙を抑えて、

「姑上のお命が今夜にも危ないのです。子供が捕まえられた所は遠い所です。私が出て行ったあとで姑上が亡くなられたら、さぞお恨みになるでしょう」と言って村長について行かなかった。村長はあわれに思っ一人で行って、子供の母親の事情を言い立てて詫げ言をすると、相手の村の人々は異存なく子供を返してくれた。<sup>17</sup>

これは簡単な短い挿話であるが、封建時代の倫理をよく表している。女性にとって大切なのはまず婚家の両親であり、夫が生きていようが死んでいようが夫の親は夫以上に大切な人なのだった。それがいいとは少しも思わないが、そのような伝統信条が心に染み込んでいれば、たとえ子供が家の世嗣であっても、自分の子供を夫の親の命に優先してはならないという気持ちが強かっただろう。もし子供が殺されれば後でどんなに悔やんでも追いつかない。この母親はそれを承知で姑の元にとどまったのである。隣村の連中もその苦境がよくわかっていたのだろう、子供を許してくれたのはいいことだった。柴を取った位でそんなきびしい仕置きをするというのは今の基準では理解できないが、貧しい寒村ではそのくらいしなければ生計がたたなかつたのかもしれない。とにかく現代の女性がこんな歪んだ親孝行倫理に束縛されていないのはありがたい。

### 孝女 3：銀二十枚の孝女

元文四年(1739)四月二十日、越後國蒲原郡の孝女つじがご褒美をいただいた。つじの母親はつまという七十七歳の老女であった。つじは四十八歳になっていたが母に孝行を尽くし、雇い主の道次郎の耕作の手伝いに出て米や薪を少しずつ貰い、落穂を拾い、朝起きて母に食事をすすめ、すぐに仕事に出て働き、日暮に帰り母に食事を与え、その間も家に帰って来て母の様子を問い、夏は茅を刈って冬の寒さを防ぐのに使った。母は病身の上三年間中風で、両便とも抑制できず、たった一枚の着物は腐りしめられているけれどもつじは母を負って行水させ、上手に介抱するのだった。母は気の毒がって死んだ方がましと言ったけれど、つじは世の中には両親のない者もいる。私は幸せにも長寿の母を持っているのが嬉しい。母が病気なればこそ介抱する事が出来るのだと言った。

去年の水害で麦稲もないので少しでも地面の落穂をひろい、あるいは袖乞いして母に食事を与え、つじは木の実ばかり食べていた。冬に備えて高山に登って茅柴を拾いたくわえ、寒い時にはつづれを脱いで母に着せ、人が憐れんで飯米薪塩味噌を恵むと母にばかり食べさせて、自分は外から飢えて帰ってももう十分食べたと言っ嘘を言っ食事をしなかつた。母は一向宗だが病気で寺参りもできないので、つじは毎日かかさず朝夕寺へまいって談義を聞いて帰り、母に語って聞かせた。つじは煙草が嫌いだったが、母が好んだので、煙管に吸い付けて母にすすめ、夜中淋しがらぬようにはからつた。つじの夫は今はなく、娘のかるが今は十六歳になったのを近年奉公に出して少しの給金を稼いだので、それで母の衣類を買った。去年の飢饉からつじの孝行はいよいよはっきりあらわれた。つじの孝行は世に知らぬ人はいないほど有名になり、元文四年(1739)四月二十日に公儀から孝女つじに銀二十枚を賜った。孝子を挙げたまう御政道は有難い事である。<sup>18</sup>

この女性は少々常識に外れている。著者の誇張があるかも知れないが、朝晩絶え間なく働いて着るものもろくに着ず、食べるものは全部母親に上げて自分は木の実と水で生きている。夜もろくに眠っていない。栄養失調、睡眠不足、過労などで倒れても不思議ではない。もしそうなれば誰が母親の世話をするのか。病気になる前に銀二十枚を貰ったからやっ少しは楽になったかもしれないが、こういうふ

<sup>17</sup> とはずがたり、p. 75。

<sup>18</sup> 元文世説雑録、p. 326-327。

うに昔の善人は少しも自分の健康状態を考えずに人につくすばかりだった。それで自分の健康を害さなかったのは不思議なくらいである。精神力だけでそんな事が可能だったとは思えないのだが。

#### 孝女 4：初の勇氣

何時の頃だったか、上野國梁田郡某村の農夫格右衛門の娘、初は足利郡上川村の逸八に嫁いで男子一人をもうけた。しかしその翌年逸八は病気で亡くなってしまった。まだ年若い女だから親元へ帰って再婚するようにと誰もがすすめたが彼女は貞節を守り、姑に仕え、息子の勘弥を育てた。貧農のことだから朝から晩まで働き通し、夜おそくまで糸を紡ぎ、布を織ってわずかな賃金をもらい、自分はボロをまともでも姑には垢のつかぬ着物を着せ、よい物を食べさせるという孝行ぶりだった。

あるそば雨が降る淋しい夜、姑は早く休んで、初は夜中にやっと子供の勘弥のねている寢床に入った。すると夜中の二時頃、表をこじ開けて賊が三人入って来た。こんな貧家でとる物もないのに、と初がおびえながらも誰か、と訊くと賊の一人が初の上にもたがって刀を引き抜き、突きつけて、声を上げると一刀で斬りすてるぞと脅した。その時姑が「さてもぎょうぎょうしい盗人だ、女子ばかりのあばらやに入って取るものもないのに、鈍い限りだ」とののしったので、賊の一人が「やかましい婆だ、息の根を止めて冥土へやってやるぞ」と刀を上げたので、初は大声を上げて我が身を忘れて跳ね起き、賊に取り付いて力の限り引き離した。賊はいらだってやたらと初を傷つけたので、初は数カ所切られて血まみれになったが、その手を離せば姑の一大事、と抱きついたまま大声で泥棒、泥棒、と叫ぶと子供も目を覚まして大声で泣き始めた。その騒ぎを隣近所が聞きつけて手に手に松明をもち、鍬鋤を持ってかけつけた。賊は驚いて逃げようとするのに初は放さない。賊が力の限りあらがってやっと逃げはじめると初は又取り付いた。もみ合っているうちに人々が来てついに賊を絡めとった。初は心のゆるみでそのまま悶絶した。隣人を見ると彼女は顔に五カ所、右の腕や脇、頭など全部で十カ所の疵を受けていた。人々は地頭に知らせ、官吏の調べがあつて賊は刑に着いた。初は療治を受けたが深い傷で筋が切れ、手など動かせなくて廢人になってしまった。しかし公儀は初の貞潔至孝を賞揚して所持している田畑の年貢を免除し、金五十両を賜ってその勇氣と孝行を顕彰した。<sup>19</sup>

またしても寡婦になった女が姑に孝行をつくす話である。孝行話は典型的で皆おなじようだが、こういう孝女大立ち回りの話は誰が聞いても感心するだろう。普通の女なら（例えば私）始めの一太刀で悲鳴を上げて布団をひっかぶってしまうに違いない。江戸時代の女性は精神的に強かった。その精神的な強さは、世間に普及している儒学的な倫理観から生まれたのだろうから、今日から見れば古くさい限りである。これらの話の孝女ぶりはいやになるほど完璧で、なぜそこまで主人の親に仕えなければならぬのかと理解に苦しむが、何であれそれほど徹底的に振る舞える程の信念を保持していた事は立派である。今の時代に日常道徳、宗教とか人生哲学とかに裏付けされて生きて居る人はどの位いるだろうか。親孝行も人間として恥ずかしくない程度に実行している人は少なくはないだろうが、とても江戸時代のように徹底した親孝行はあまり見られないだろう。

#### 孝女 5： 舅孝行

若狭の国の、糸という名のたいへん貧しい女は、十四の年から他人の家に入ったが夫は間も亡くなった。その後糸は気難しい老人の姑や舅を肉親の以上にいたわりかしくずいて来た。姑が亡くなった後、舅がどんなにか淋しいだろうと殊更気をつけ心をこめて仕えた。翁は七十ばかりで老衰耄碌して、愚かになり何かにつけて幼い子供のように泣き叫び、朝夕の食物などは季節はずれの物をほしがってききわけのないことが度々あったが、糸は翁の言う通りに何とかとりつくろって食べさせていた。

冬の頃時雨れて海上は風が吹き荒れて漁師たちも仕事に出られないとき、この翁はおいしい真魚を食べたいと言いだした。七日程しけている上に真魚などそのあたりの海では何処へ行っても獲れない魚である。ないと言ってもわからない老人なので、糸は天地の神に何とかして真魚を手に入れさせて下さいと祈ったが験はなかった。仕方なく凍り付きそうな海辺へ出て行って波打ちぎわに魚がうちよせられていないかと探し廻ったけれどももちろん何もなかった。

<sup>19</sup> 江戸雀、 p. 348-353。

(これは私の心が汚いので神様がお願いすることを聞いてくださらないのだ。仕方ない、空も海もおさまればきっと何でも作ってあげますと老人に言おう)ときめて、泣く泣く家へかえると翁は泣き叫んで真魚が喰いたい喰いたいとわめいていた。糸はその背中をさすって「今漁夫どもが舟を沢山仕立てて釣りに出ていますから時間がたてば真魚を取ってくるでしょう。その間おいしい朝食を作ってあげますから気持ちよく食べて下さい」と言って乾魚などを上手に料理して食べさせた。老人はそんなら夕食はきつと真魚をくわせろと言って少しおさまった。

糸は老人のひどく湿っている着物を脱がせて乾いた着物を着せ、汚れた着物を洗っていた。すると鳶が飛んで来て目の前に何か落としたと思うとそれは生き生きとはねている魚だった。捕らえてみると二尺ほどもある鰯なので夢かとはばかり嬉しかった。それを持って帰って煮たり焼いたりして舅に食べさせると彼は限りなく喜んだ。

この話は間もなくひろがって、糸が翁に仕える誠心の深さを神々が賞でられたのだという噂が流れ、ついには国主に聞こえて立派な褒美をいただいた。翁が亡くなった後も糸は生前にましてねんごろに舅姑を弔っているということである。糸も今は四十くらいになって同じ所に住んでいるそうだ。<sup>20</sup>

このような孝行物語は皆典型的であるが、昔起った話ではなく、今も当人が同じ所に住んでいるし年も四十くらいだと具体的にことわってあるから、だいぶ実感がこもっている。

孝行話にはよく魚が出て来るが、なぜだろうか。ここには一つだけ例を上げたが、病気だったり毫碌した親や舅が魚を食べたいと無理を言う話は他にもある。日本はやはり海国だと思わざるを得ないが、よい魚は贅沢な食べ物だという観念と貧しい人の望みがつながっているのだろう。貧乏人に取って一番必要なものは金だろうが、金が手に入っても口腹の慾はすぐには満たされない。真冬に店へ行っても魚がなければ金では間に合わないのである。そういう事から奇跡話孝行話に魚が登場するのであろう、そうしてその原型は中国の二十四孝の王祥や孟宗や姜詩の話である。

## 不老不死の女

筑前國遠賀郡には伊万里の焼き物を船に積んで諸国を回り渡世とする人が多かった。天明二年(1782)五月、そんな商人の一人が奥州津軽の船宿に泊ったあと山路に迷い込んだ。道をさがしてさまよううちに、谷川の水に野菜屑が流れて来たので人里があることを知って川に沿って登って行くと一人の女が洗濯をしていた。事情を説明して、どの方角へ行ったら人里に出られるかを聞くと、女房は「ここは深山で商人が来る所ではありません。里に出る道は半分も行かないうちに日が暮れるでしょう」と言う。商人は、「昼でさえ道が分らないのに、夜になれば狼も出て来て私は餌食になるだけでしょう。實の子の端でもよろしいから一夜明かさせてもらえませんか」と手を合わせてたのんだ。

女が何処から来たのか訊ねるので九州筑前の者です、と言うと驚いた様子で、「ああなつかしい」と涙ぐんだ。「私はもと筑前の庄の浦という所の者でしたが、二度の不縁の後、二十五歳で庄の浦に嫁入って男女の子供を生みました。故郷の国の方に巡り会うのも不思議な御縁ですから、見苦しいところですが草の筵にお休みください。夜もすがらお話致しましょう」と言ってくれた。

主人は仕事で旅、子供は二三人いるそうだ。「私はもともと卑しい海士の子でしたが、寿永(1182-1185)とか言う申年のころ、安徳天皇が都落ちなさり西海に漂白あそばされ、山鹿の東の山奥に仮の皇居を構えておられたとき、私も海女として海のを獲って御所に時々差し上げました。あるとき私は病気で食事減りやせ衰えました。田舎の事で薬もなく今にも死にそうになった時、私の二人の子供は枕のそばで泣いておりました。ある日子供たちが磯で一つのほら貝を拾って帰りこれを煮てくれました。それがことの外よい味だと思ってからだんだん食事すすむようになり、貝を二三日で食べ終わったあとはすっかり丈夫になり、その後病氣したことはありません。

「ところが何年何十年たっても年を取りませんので、貝は不老不死の薬だったのでしょうか。今数えると六百年も昔の話で、我ながら不思議な身の上だと思います。けれども人の命には限りがあるので、夫も世を去り、子供も孫も皆亡くなってしまい、曾孫、やしゃごまでも次第に亡くなりましたのに、私一人だけ生き伸びて、嘆き苦しみの多い身の上です。けれども外見は衰えることもないので、こうして生きている事がうとましくて何度海川へ身を沈めようと思ったかわかりません。唐土の仙人とやらも

20. 折々草、p. 71-72。

私のように長生きするそうですから、それでは一体何年生きられるか、生きられるだけ生きてみよう、  
 と思ひ直して何代も生きていたうちに、私の里は海も湖も干潟になり、昔神功皇后がお船を繋かれた場  
 所もいつしか田圃となり、いわし山、蜷瀬（あまがせ）岩瀬などという所も名前だけのこって昔の跡形  
 も見えなくなりました。その間には戦争もあり平和なときもあり、さまざまな経験をして参りましたが、  
 女の身ですからよく覚えてもいません。

「そのうち、住み慣れた故郷も住みにくくなり、国々の神社や寺を巡りたい望みが強くなったの  
 で、子孫にいとまごいをして豊後、土佐、阿波、讃岐など、弘法大師の尊い霊場を巡礼し、船に乗って  
 長門の国に渡り、出雲、石見、伯耆などへ行きました。年を経て因幡の国へ行ってお宮にぬかずいてお  
 りますと、土地の人が来て、

『ここは六代の天皇におつかえして三百歳の長寿をまっとうした武内の大臣のおやしるです。貴  
 方も若い人だから長寿をお祈りなさい』と申しました。私は自分のうとましい身の上を語る気にもなれ  
 ず何かと話しているうちと、若い女一人で何処の国へ行くつもりですかと訊かれたので、はっきりした  
 あてもなく諸国の神社仏閣を巡っている事を言うと、急ぎの旅でなければその家に泊るように、とすす  
 められ、伴われて行きました。

「この人はやもめで裕福な農家でしたが、夫婦の語らいをするうちに夫は年と共に老いおとろえ  
 たのに、私は少しも面変わりしませんので、人々が怪しんで、化物ではないか、キリシタンとかいう者  
 ではないか、とささやきあっているのが聞こえてきました。それでそこにも留まりがたく、密かにしの  
 び出て、京都から東の国々をへめぐりました。この陸奥の津軽に着いてから、またもや断りきれずに此  
 の家の主人と一緒にになりました。

「私が筑紫におりましたころは、今の綿というものがありませんでしたので麻をつむぎ、布を織  
 ること千反あまりにのぼりました。故郷を出た時、あのほら貝の殻が私の命の親でしたので、所の神職  
 の方に、小さい祠に納めて私の形見と思ってくださいとたのんで出て来たのですが、それがもう限りな  
 い昔になってしまいました。あのほら貝はどうなったでしょう。その小祠（ほこら）のあたりに『舟留  
 の松』という大きい樹が一本ありました。松は千年といいますから、今でも朽ちないで生きているかも  
 知れません。もしそこへいらっしゃることがありましたら、それを目印に、万が一私の子孫等がおりま  
 したら、訊ね出してこの物語をお伝えくださいませ。」と女は夜もすがら語り明かしたという。

その商人は今年の十月に庄の浦を訪れて、伝治郎という者の家にそのほら貝が伝わっているの  
 を見た。そうしてその祠の傍に古い松の木があるのも見つけて奇異の思いに駆られた、と伝次郎に物語っ  
 たそうである。

晝鐘成によると、「船留の松」というのは往古神功皇后が船を繋がせられたところだとそうだ。  
 その樹下に今貴船の社という小祠がある。それがその女の貝を納めたというほこらであろう。三韓征伐  
 の時、船がここで座礁して進めなくなったので 神功皇后は神八井耳命（かんやいみのみこと）の遠孫  
 多氏（とうし）に命じて船神を祀らせ、自ら松を植えさせられたと言う。その後裔の多武乙隅（たけおと  
 ずみ）の子の多乙麻呂という人が天喜の頃（1053-1058）ここに住んでいたそうだ。今でも多氏屋敷（とう  
 じやしき）というものがある。諸乙麻呂の住居の後だから、今乙丸村（おとまるむら）というそうだ。  
 これが庄の村の本村である。

この家には昔から流行病にかかる人がなく、たまたま病人が出るとあのほら貝に水を入れて飲ま  
 せる。するとたちまち回復するそうで、昔から医薬を使ったことはなかったと聞く。また近い村に流行  
 病が起ったときは、このほら貝を吹いてお祓いをする習慣だったのだが、何時からかそれはしなくなっ  
 たとの事である。

女については、明和（1764-1771）の中頃の風説に、因幡國に筑前から来た女だといって、いつま  
 でも年をとらない者がいた。人々は怪しんで切支丹宗かと噂したので、役人が國へ送り返したという。  
 それがこの女だとすると、奥州へ行ったのはあまり昔のことではないだろう。岡部久伯が山鹿に逗留し  
 ていた時にこの話を聞いて、庄の浦へ行つてそのほら貝をみると、いかにも古物らしく、口のあたりが  
 所々かけ損じていたと話していた。<sup>21</sup>

江戸時代の随筆集にはよく百何十歳という男女のリストがあるが本当かどうか疑わしい。町の女  
 の部にも十五歳の少女が八十七歳の老人と結婚し、夫は百三十六歳まで生きたという話があった。多く  
 の場合は記憶もさだかでなくなった人達が覚え違いをいい加減に言い立ててその仰山な年がそのまま記

<sup>21</sup> 兼葭堂雑録 P. 105-11。

録されたのだろう。幕府は長寿の人達を表彰する事がよくあったから、嘘でも何でも高齢の方がトクだと思ったのではないか。しかしこの話は誇張が過ぎて六百歳以上というのだからすさまじい。こんな大仰な話をする人やそれを信じる人がいたとは思えないが、これも誇張を繰返しているうちにとんでもない数字にふくれあがったのかもしれない。しかし 寿永(1182-1185)から天明二年(1782)までとちゃんと年号が出ているので一概に無視出来ない。又彼女の故郷を見に行った人がたしかに昔奇跡をおこなったほら貝を見たというのだから、お宮にほら貝があったのは確かだろう。それが六百年も昔の物か、又それが病氣回復の奇跡を行ったかどうかは別である。

## 長寿法

つや女という女性は百十六歳である。彼女は二十余歳の頃病気にかかり医薬は効果がなかったが、人の教えをうけて一日に午前十時と午後五時にだけ食事をして他の時間には食べなかった。貧しいので人の針仕事を助けて、夜中十二時に寝て朝は四時に起き、酒は二三杯、餅などは四五切れに限っていた。まだ若い時はまだ少し病気をしたが養生して、その後は一日二度の食事でこれほど長く生きることができたのである。私が出会ったのは天保八年(1837)だった。<sup>22</sup>

木室卯雲の『奇異珍事録』の中にも、安昌という名の怪尼がいて二十年来穀類を食べず湯茶も飲まないのに年は三十くらいにしか見えないそうだと書いてある。<sup>23</sup>

『甲子夜話』の松浦静山も、『雑談集』に出ている話を引いて二十年来全く絶食している尼のことを書いている。昔、西三河の足利義氏夫人の菩提寺がおとろえ荒廃したあと、小庵になって地藏尊を安置していた。同村産の比丘尼がその本尊を奉ってその庵にすんでいた。その比丘尼は当年(この当年が何時のことかわからない、『雑談集』が出された十四世紀のことだろうか)四十歳余りだが、十七、八歳の頃から、五穀果実の類を一切食べなかったので、父母がなげいてさまざまな腹薬を与えたが、少しも食物をほしがらず、一ヶ月間絶食しても顔色も様子も少しも変わらない。食物を取るとかえって苦しんだ。その内に月日がすすんで断食以来二十年になった。普通は紡績を仕事にしていて機を織って暮らし、庵室の修理に費やしていた。有名になって遠くから人々が会いに来たが訥弁で話す事が出来なかった。その父母は近辺に住んでいるので訪ねると、すべて事実であり、娘は古来五穀を立っても果実や木食をする人はいるがこの尼は一切断食だそうである。<sup>24</sup>

この後の二つの挿話の出所は多分同じで 木室卯雲の『奇異珍事録』の出典も 嘉元2年(1304)の仏教説話集『雑談集』(無住道暁編)なのだろう。この話は記録されているにもかかわらず、全く化学的には実証され難い話なので、まず信じない方がいい。人間の体は栄養の補給がなければ生命を維持する事は出来ないのだから。木室卯雲の方は 二十年来穀類を食べず湯茶も飲まないとは言っているが、果実や野菜を食べないとは書いてない。それは『雑談集』にそうあったのか、それともは原語を変えたのかどうかかわからないが話は伝えられる度に変化するのである。この二つの二十年来断食と言うのは十七年間の妊娠同様無視してもいいと思う。

もっと普通に考えると、一般的に女性は男性よりも長生きすることは常識である。つや女が一日二食と決めて酒や餅の量を限ったことは賢明な節制法だったが、睡眠を一夜四時間しかとらなかつたというのはどうかと思う。そんなに限られた睡眠でよく百十六歳まで生きたものである。先に長寿の話が出たときに年寄り自分の年を忘れてしまっていていい加減に誇張しているのだろうと書いたが、読み書き能力が昔から割合に高い日本人は自分の生まれた年を覚えていれば簡単に計算できたはずだから必ずしも嘘を言ったり誇張していたとは限らない。しかし百十六歳というのは、自分の健康に十分気をつけている—どこか必死で健康管理をしている現代人でさえ届きにくい高齢である。毎夜四時間だけ寝た人

<sup>22</sup> 雅俗随筆、p. 206。

<sup>23</sup> 奇異珍事録 p. 163。

<sup>24</sup> 甲子夜話2、p. 271。



間がそれだけ生きられたかは疑問である。しかし一日二十時間も起きていてそれだけ頭や体を使ったのなら、一日に完成した事はすばらしく多かったに違いない。たいした女性である。

## 八歳の母親

これは文化九年(1812)九月十一日に届けられた書類の写しを略したものである。

常陸國筑波郡の百姓の次男忠蔵は、藤代宿の酒屋でに杜司(とうじ)をつとめていた。同宿百姓の娘よのも同じ店で働いていた。忠蔵とよのは何年か働いた後暇を取って夫婦になった。

八年前によのは女の子を生み、とやと名付けて育てていた。とやは不思議なことに四歳の頃から月経が始まったのだが、今年八歳の正月にそれがとまり、四月頃から妊娠の兆候が見え始めた。両親は、子供だから妊娠などするはずはないが、変な病気もあるものだと心配して、産科で評判の内藤道因という医者をして診察させた。内藤は妊娠と診断し、特に月経がとまった事から多分相違ないと言ったが、十歳以下の子供のことだから疑わしくて、あちこちで占わせた所、狐狸の所為だろうと云う者も出て来た。そのうちに月をかさねて次第に胎児は体内で動き始め、いよいよ懐胎が疑えなくなった。すると九月三日の午後六時ごろにとやが小用に立って寝床へ帰ってくるとすぐに安産、男子を出産した。其のときから乳は豊かに出るので赤ん坊はよく乳を飲み、母子ともに肥立ちもよく、健康だということである。

忠蔵の家に代官某の手代が立ち寄って確かめた上、近所で事情をくわしく調査して記録した様子である。

此時に誰かが残した歌：

いも(妹)となして子種を孕めるは生むてうとしも八ツかしらなり

ついでに書くが、永禄七年(1564)の昔、丹波の国で七才の娘が女の赤ん坊を生んだ事が年代記に見えるので、例のないことではない。けれどもそれは見たこともない大昔の事だから事実かどうかわからない。今度八才の子が子供を生んだのは現代の事で、私の実父理齊翁の友人の岡野義方が、仕事のことでその近辺を見廻った時、自分の目で見て来て父に語ったのだ。芥子坊主頭をした母親が日向にうずくまって赤ん坊に乳を飲ませていた様子は全く似つかわしくない情景だったという。<sup>25</sup>

上記の歌は芋と八がしらをかけた狂歌だが、江戸後期の人たちは狂歌に凝っていたからどんな場合でも(喜劇的でない場合でも)すぐに狂歌が出て来たのだという証明である。毎日を楽しむ事を知っていたのだ。近年六十九歳の女が子供を生んだというニュースはあったが、幼い少女が子供を生んだという話はないようである。長年子供が欲しくて色んなホルモン療治をしたり多産薬を飲んだりする人達が非常に多いので、八つ子を産んだり、多産治療をやめてしまつて後に、常識では考えられない高齢になってからその効果が現れたりすることがあるらしい。

江戸時代の幼女出産はそんな年で恋に陥ったり自分から望んで性交するようなことはまずなかったと思われるので、大人か大人に近い少年の強姦の結果だろう。月経が異常に早期に始まった少女だから妊娠出産に至ったのだろうが、考えてみると江戸時代の農村では血気さかんな青少年たちが、まだ若すぎる少女に暴行するという事は珍しいことではなかったのだろう。それを親に訴えなかったのは羞恥よりも知識の欠如から、何が起ったのかわからなかった場合もあっただろう。子供は案外秘密を持つ事が多いのである。ましてや大人の男を難詰することはなかっただろうから、犯罪である強姦をしても公にはなることは少なかったのである。中国にも七八才の少女が出産した記録があるそうだが、日本では農村の少女の方が町育ちの少女より身体的には早熟健康であつただろうから、記録されない例は農村にもつとあつただろうと思われる。同じ話は『耳袋』や『塩尻』にも少し違う形で見られる。

## 妻の執念

文化年間の春、親友が来て彼の知人が去年大和巡りをしてその土地で聞いた珍しい話をした。彼が休んだ茶屋の主人が話してくれたのだそうである。

<sup>25</sup> 宮川舎漫筆 p.272-273。

ある日その茶屋に十五六の美しい尼が来て、当国の何とかいう名高い寺はここからどの位ありますかと尋ねた。なぜその寺を訪れるのかと聞くと尼は「私は幼いとき両親を失った身ですが、わけがあって尼になったので、その寺の和尚様の御指導を受けて修行したいのです」と言う。

「あなたはそんなに若くてきれいなのに何のために発心なされたのですか、ありのままを話してくださいればお宿をしてあげましょう」と主人がいうと、

「では懺悔をいたしますからどうぞ家中の方達を集めてお聞き下さい」と尼は答えた。主人は妻子はもちろん近所の人たちも集めて尼の話聞かせることになった。

その女性は近くの村の出身で、両親は彼女が生まれると間もなく死んでしまった。始めは村中で赤ん坊の世話をしていたが、後にはその村の豪農が不憫がって養いとってくれた。その家で大きくなるうちにいつしか十五六歳に育ち、主人は娘が美しいので通じてしまった。すると主人の妻が病みついたが、なかなか回復せず日増しに重くなるばかりだった。可愛がって育ててくれた人だから、娘は心をつくして女主人を看病したが、もう望みも薄くなったころ女主人は夫に言った。

「私はもう助かりません。死んだ後、後妻をお迎えになるのであれば、小さいときから養って来たあの子を私の後に据えてください。」

主人は「何を言うのだ。よく養生すればきっと元気になるから」とうろたえながらもはげました。

娘も熱心に看病を続けていると、ある日の夕暮れ主人が村用で外出しているとき、病人が「今日は珍しく気分がいいから近くの観音へ涼みに連れて行っておくれ」とたのんだ。娘は病状が心配だったが、断つたらもっと悪くなるかと思っただけで彼女の手を引いて出かけた。途中歩くのが苦しうなもので、娘は病人を背負って歩き出した。

しかしまもなく、ことの外苦しみ出したので、「どうなさいました」と言って振り向くとその顔はぞっとするほど恐ろしく変わっていた。

娘はわっと叫んでその場で気絶して倒れてしまった。

一方主人は用事を済ませて帰ってみると妻も娘もいない。訳を聞いて主人は、病人の身で観音参詣などんでもないことだ、とさっそく召使いや村の者と一しょに探しに出た。間もなく路上で二人が見つかったが、負われていた妻はすでに亡くなり、おぶっていた女は気絶して倒れていた。水を吹きかけると娘は生き返ったが、妻の両手が娘の肩から胸へしっかり取り付いていてどうしても放れない。色々試してみたがはずせないで仕方なく両手首を切り落として死骸だけ厚く葬った。

「私の肩に取り付いた手首はいまだに残っています。その後私は尼になりました」と尼は話し終わった。茶屋の主人は年若い美しい女の一人旅では、若い男などが理不尽なことを言って来ないかと疑わしうに尋ねた。すると「男たちが言い寄っても、この手首を見れば怖れて寄り付かないでしょう」と尼は言っただけで肌を脱いでみせた。家内村人一同ぞっと青くなって引き下がったと茶屋の主人は語ったそうである。<sup>26</sup>

これは怪談でもないのにそうとうに気味の悪い話である。作られた話だとすると想像力豊かな人のオリジナルな作品である。美しい女でもやせ衰えた老女でも、幽霊の話はいくらでもあって、人々は馴れているが、美しい若い女の真っ白い肩から胸にかけて一生取りついて離れない手首というのは想像を絶する。手首は切られたのだから死んだ後でも血が出たはずである。その後どうなったのか、だんだんに干涸びて来たのだろうか。腐らなかったのだろうか、などと馬鹿なことまで心配してしまう。白い肩にこびりついた手首は全く効果的な悪漢防止になっただろう。妻の執念がそんな形を取ったのかと思うと男性が女は怖いというのがわかるような気がする。しかしこれは実話ではあるまい。

## 針妙

裁縫をする女のことを針妙というのは隠語が普通の家庭に移ったのである。寺で秘密にやとっている女をめうと呼ぶのだが、その意味は妙の字を二つにわければ少女となるからだ。物を縫うためにおくので、針の字を上になぞらえたのだと思われる。『醒睡笑広本』の三の巻にこんな話が出て居る。或人が檀那寺を訪れてしばらく雑談して、帰る時に住職に「明日は無菜(おかずが少ないこと)の食事を差し上

<sup>26</sup> 耳袋、2：248-250。

げましょう」というと、庫裏からめう（針妙）が出て来てうっかり言った。「ちょうどよかった、明日はお坊様の精進の日ぢや」。<sup>27</sup>

なまぐさ住職はとんだ所で日頃の贅食無節操がばれてしまったが、この妙といふのは住職の妾の事らしい。江戸時代もこの話の出典、安楽庵策伝の『醒睡笑』（1628）頃になると僧侶のさまざまな破戒ぶりは世評に高かったのだろう。寺の住職が女を置き、生臭いご馳走を毎日食べているのは檀家の者たちは皆知っていたが誰もその事を暴き出して言いはしなかった。安楽庵策伝などの勇敢で意地悪な諷刺家はその蓋をあけたので外の連中、戯作者たちがそんなことを普通に書き始めたのである。しかしその時から三百年も前の『徒然草』などでも僧侶の俗化は十分知られるのでこれは珍しい発見ではない。

### 珍話奇話 1： 油壺

これは中与左衛門という千三百石の侍（岸和田の岡部美濃守の長臣）が知人の浪人西道壽に話したことである。主人美濃守の領内に不思議がおこった。領内の志智山村に刑部作という百姓がいた。ある時刑部作が妻に向かって、「昨夜油がなかったから、今日は買って来ようと思っている中にすっかり忘れてしまった。今夜は草履を作ろうと思うのだが、灯火がないから何もできない」と言った。女房はそれを聞いて、ひょっとして油のかすでもあれば、と思って陶器の油壺を取り出して傾けてみると、中から油が土器に八分目ばかりも出て来たので、その夜はこれで十分事足りた。

次の夜も刑部作は「今日も又忘れて油を買わなかった、しまった！」と頭をかいたけれども仕方がなかった。田舎のことだから、五六町ばかり歩かなければ油を売る店はない。その時女房がまた土器を出して、よもやもうないだろう、と傾けてみると、又土器に八分目程の油が出て来た。それからは不思議だと思いながら傾けてみる度に油が出て、毎晩油はつきる事がなかった。二三ヶ月もその不思議がつづいたので、その噂は近所にもひろがり、希代の珍事だと言ってその村の庄屋から代官に報告して領主の耳まで達した。領主は「さてさて不思議なことだ、それは刑部作の福なのだろう」といわれた。

去年志智山村の近辺で領主が鷹狩りをおこなった時、その庄屋に案内させて刑部作の家を訪れ、その陶器を見たいと言った。刑部作はふちのかけた、縄のついた備前焼の壺を持ち出して見せた。振ってみると、中に入れ子があるように思われるほか別に変わった事もない。もうこの奇跡がはじまってから五年になるというのに油は尽きる事がないそうである。希代の事ではないかと中与左衛門が言われた、と道壽が語った。<sup>28</sup>

昔の人たちは噂話を、まるで見て来たように話したらしい。聞いている人は、そんなことがあるはずはない、と思っても否定してけんかになるよりもそのまま受け入れておく方が方便であり、また娯楽にもなったので話は人から人へと伝わった。こんな奇跡話はその壺なり物体が特別な由緒ある物であるか、神仏のご利益で、感心な人物に特典が許されたのだという説明が普通だが、この百姓は別に正直で勤勉で孝行な百姓というのでもなさそうである。又実際に油を壺からつぎ出す事の出来たのは妻である。妻にどんな徳があったのかそれも説明されていない。なぜ「ご褒美」の要素がないのだろうか。そういう奇跡には、昔の人達は正当な理由がないと嫉妬したり悪口を言い始めるのが普通だったが、...

### 珍話奇話 2： 洪水予報

安永七年(1778)七月二日、京都で未曾有の洪水が出た。山々から水が吹き出して谷は崩れ、洛中の堀川や小川はすべて溢れ出した。又西陣の大宮通りの上の水門は破壊して、町々の地下からも水が涌出し、橋は倒れ、家は流れ、溺死するものは数知れなかった。

その前日の昼頃、六七人の百姓が昼休みの間暑さ逃れに一乗寺村の天王社の拝殿に行ってみると、二十四五歳の見慣れない、容貌の卑しくない女がいた。衣服は質素な木綿の単衣で、髪も手拭で包んでいた。若い者が軽い気持ちでどこから来たのかと問うと、女は何気なくこの辺の者だと答えて拝殿の絵

<sup>27</sup> 柳亭記、P. 403。

<sup>28</sup> 二川随筆、p. 397-398。

馬を見て回り、独り言のように、病苦平癒の願に絵馬を奉るのは当たり前だけれども、諸願成就の為と書いているのは慾深で馬鹿の至りだと言って笑った。

若者たちは、若い女一人で、連れでもあるのか。何処へ行くのか、と口々に問うた。女は、連れはない、これから上の村へ行くのだ、と答えて、頭の手拭を取って振り返ると、非常にあでやかな顔に似ず、束ねた髪は真っ白だったので、美しい顔が恐ろしくものすごく見えた。みんなが驚いていると女はあつという間に村はずれに向かって走って行ってしまった。あまりにもあやしいので行く先を見届けようと二三人が後を追ったが行く方がわからず、みんな不審がりながら野働きに帰って行った。

この日の午後、女は上の村の庄屋喜内の家へ行って、勝手に入口から座敷へ通り、床の間に座っていた。喜内は留守で、女たちは人が来ているとも知らず台所にいたのだが、一人がふと座敷へ行って女をみつけ、狂女のような人が居ると騒ぎ出した。一同で行ってみると彼女は落ち着き払って正面に座っていた。「どなたですか」ときくと、ただ「この辺の者です、御主人はお留守ですか」という。家人が主人は用事で京都に出たと答え、それにしても案内もなく見知らぬ家の座敷に上がって、亭主に何の用があるのだ、となじると、

「お留守ならば帰りましょう。用は一言言っておきます。今日中にここをお立ちのき下さい。そうしないと大難がくるでしょう。私もこの辺に住むことができなくなるので今日立ち退くのです」とそれだけ言って立ち上がるや否や風のように村の上の方へ走り去った。家の女たちは怪んだり気違い女だと嘲ったりした。

夕方になると喜内が帰って来てその話を聞いたが、ただ不審に思っただけで決心できないでいると、暮れ過ぎから雨がしきりに降って来た。まもなくその雨は次第にはげしい大雨に変わり、車軸を流すごとく、山からも地からも水が湧き出て家々に侵入した。まず喜内の家が一番先に崩れてしまった。隣の村の家々も数多く壊された。あれは本当の警告だったのだと皆思い当たって後悔した。一体誰だったのだろう言い合ったがわからなかった。年来この辺りに住んでいる大蛇がこの変を察して住居を変えたのだろうと言う人もいた。

しかし今年の水は本当にいったいどういうことなのだ。著者も所々で見たが町々の地下から夥しい量の水が湧き出ていた。「狐死すに丘に枕す」という諺は動物がその源を忘れないでいるという意味なのだが、狐にせよ蛇にせよ、この怪女も久しくこのあたりに住んでいて、土地の人々の恩に報じるために急難を告げようとしたのだ。一緒にたち去るべきだったのだろう。<sup>29</sup>

『狐死して丘(きゅう)に首(しゅ)す』という諺は、狐は平生丘の穴に住んでいるから、死ぬ時には首を丘の方に向けて死ぬという意味である。人間も動物も故郷を忘れないというたとえである。たしかにその女の行動の素早さは狐を思わせる。動物が天災を感知してその地を去るとか建物を去るという事はよく知られている。しかし人間に化けてそれを予告してくれるというのはどうだろうか。これが実話ならば狐はほんとうに人間に(女に)化けるのだという証拠になるのだが、確かな証言ではないので残念の極みである。この話ではその地の主(ぬし)のような大蛇のことが出ているが、大蛇が女に化けるといふ話は例がないようだ。狐にしても、一つでも実際に狐が女に化けて出たという話が証明されれば面白いのだが。

### 珍話奇話 3: 異形の鬼女

安永年間のことだが京都一乗寺村の百姓二人が柴を刈りに比叡山の北の山中に入った。運べるだけの柴を刈って、もう帰ろうと立ち上がると、前方の谷の岩の上に恐ろしい異形の者が立っているのが見えた。様子は女のようなのであるが、振り乱した長い髪の間から両眼がぎらぎら輝いている。左の手には亀をつかみ右の腕には長い蛇をまとわせて、むらむらと頭から生き物を食っているらしいので、二人は身の毛もよだち胆をつぶして、眼を見合わせるや否や柴を投げ出して物も言わずにさっさと駆け下りた。

一人の百姓は我が家へ逃げ込むなりわっと叫んで気絶した。家内中騒ぎ出し水を吹きかけながら名前を繰り返し呼んだ。男は息を吹き返すと山で見た事を語ったが、すぐに大熱を出し、悪寒も強くなって悶絶した。家人たちは男に夜着布団を重ねてくるませ、使いを近くの金福寺に走らせた。寺の住職は医者ではなかったが医療にくわしいので見てもらうためだった。住職はその話を聞いてよくよく様子

<sup>29</sup> 笈埃随筆 P. 46-47。

を調べた上で、鬼怪物におびやかされて邪気にあたったというのは普通の害ではないと言って敗毒散を調合した。又庭に大盥をとりよせて冷水をなみなみとたたえ、歯の根もあわずに震えている病人を裸にして大勢が寄って盥の水の中に入らせた。その後で絶え入るばかりにがたがた震えている病人を座敷に座らせ、戸障子も開け放して風通しをよくし、すぐに煎薬を吞ませた。

そのうちにもう一人の百姓の家からも同じく急を告げて来た。住職が行ってみるとこれも同じ様子である。けれども時間がたっているのだからこちらは水を浴びさせにくだらうと言ってただ薬を飲ませて邪気を払った。

一ヶ月ばかりで始めの百姓は全く平癒し、後の一人は五十日ばかりでこれも平癒した。このことを皆噂して、女人結界の山だから、鬼女でも住むべき所ではないが、ひょっとすると山姥などというものだろうか、と様々の推量をした。志賀寺の門番の女房が以前、ときどきふと山に入っては数日過ぎて家に帰ることがあったが、後には一向家に帰らず行方も知れなくなっていた。ときどき此の山奥で見かけた者もあったが、以前の面影もなく、衣服は破れちぎれて、恐ろしい姿だったということだった。聞いた人々はそれではこの人だろうか、と推察した。

著者(百井塘雨)は相模の国の大山不動尊に参詣した時、人の教えるとおりに二重の滝と言う所へ行った。ここは大杉が鬱蒼と茂り立ち、すさまじくも寂とした山間で、行者が水垢離をする所であるから昼間でも暗く恐ろしい。男でさえそう思うのだ。ましていわんや夜中に女が行くことなど思いもよらないのに、数本の大木の杉に釘が打ちつけてあるのを見て身の毛もよだつ思いをした。昔貴船明神に祈って生きながら鬼女に変身した女のことが書かれているのも全くのでたらめではないかもしれない。<sup>30</sup>

百井塘雨は昼でさえおそろしい山中に人を呪う為に杉に釘を打ちに行くのは必ず女だから、女というものは怖いものと言っているのである。たしかに男性が人を呪って杉の木に釘を打つ話など聞いた事はない。女性の「丑の刻参り」というのは昔の人達の呪いの方法で、鈴木春信の浮世絵でもよく知られているが、それは春信特有のかわいらしい少女なので女は怖いものだと思う人はいないだろう。実際夜中二三時に人を呪いに山中の神社の杉木立まで出かけるには相当の勇気が必要である。人をそこまで呪おうという女性はよほど思いつめていておそろしいとも感じなかったのかもしれない。しかしそれまでして一体効果があったのだろうか。

#### 珍話奇話 4: 馬の顔

松浦静山の家来の妻の叔母は若くして夫におくれ、世をはかなんで四国巡礼に出た。その旅先で彼女が目撃者から聞いたという話である。

ある処に慈悲深い豪農がいて、いつも米麦をためておいて乞食にほどこしていた。その人の娘は親に似ず食欲で、乞食にやるとウソを言っては米麦を自分の物にしていた。その家に一人の親切な女中がいて、顔は醜かったがたいへんやさしく、主人の言いつけをよく守っていた。あるとき彼女が乞食僧に米を出して与えたのを娘が見て咎めた。女中は「御主人のお望みでほどこすのです」と言ったが、娘は叱って、すぐに乞食を追っかけて行って米を取り返して来るようにと厳しく言いつけた。女中にとっては主人の娘も自分の主人だから仕方なく貧しい僧を追って行って間もなく追いついた。

すると僧は「さっきの米を取り返しに来たのだろう」と言う。

「そうです。まことにすみませんが。」

「私にはわかっているよ。さ、早く持って帰りなさい。しかしお前にはこの布をあげよう。それで毎日顔を拭いてごらん、必ずだんだんきれいになるよ」と僧は言った。

女中は手拭をおしただいて持って帰って娘に報告した。娘はあざ笑って米を取り上げた。

女中が僧に言われた通り毎日手拭で顔をふいていると、その顔のあばたは日に日に薄くなり彼女はだんだん美人になってきた。

妬んだ娘は話を聞いて女中の手拭を取り上げ、自分の顔を毎日せっせと拭き始めた。すると日がたつにつれて彼女の顔は次第に長くなり、馬の顔に似て来て最後には本当に馬になってしまった。見る人はみんな驚いたが、家族はこれは神仏の罰ではないか、あの乞食僧は神か仏だったのだろうと言いつ

<sup>30</sup> 笈埃随筆 p. 88-90。

めた。そうしてこの馬を家につないで、来る人々に皆見せて教訓としたという。これは全くでたらめではないだろうが信じ難い。要するに怪しい話である。<sup>31</sup>

神仏賞罰の話は多いが、罰として馬の顔に変貌させられたというのは変わっていてひょうきんである。なぜ馬の顔で、牛や豚の顔でなかったのかはわからないが馬の顔はぬきんでて長くて化粧をどんなに厚くしても隠しようがないからかもしれない。神様も考えたものである。

## 珍話奇話 5：つねのミイラ

これは文化九年(1812)の夏のころ、相模國の代官某の支配所によって掘出されたひからびた死骸の様子を述べた報告書である。

相州津久井県名倉村の名主源内の女中のはなの娘、つねは、四年以前六月廿日に二十六才で病死した。つねは源内が所持している字谷向と呼ばれる芝地に埋葬されていたが、つねの母のはなが、今年五月十日にこれも病死してしまった。女中でも家族は同所へ埋葬するのが掟であるので、村内の者たちがおもむいて墓を掘った処、その鍬が折れ当って、つねが入葬されていた桶がこわれてしまった。見ると、つねの形は其儘残っていて、殊に色白だったので幽霊のように見え、穴掘りの者たちは怖れて逃げてしまった。源内は同村桂林寺の住持に頼んで同道してもらい、もう一度検分したところ、朽木のような塊があったので、桂林寺へ持参して法華経回向と弔いを依頼した。

その遺体は座像の高さは一尺八寸程あって、棺から出した後、体は日に増し薄黒く変色し干からびて来た。左眼を明き、右眼をふさいでおり、鼻はくぼみ口は結ばれている。両耳はついているが、眉や髪の毛はなく、頭を下げ両手で合掌している。膝をたてて、手足の爪はことごとくあって、乳の肉や腹の臓腑は自然とかたまっている。陰門肛門の穴はひとつになってしまっている。死骸を打ってみると、ボクボクと鳴り、重さは三才位の小児ほどしかなく、手足等は特別にかたく虫ばんでいるが匂はないので蠅もたかっている由である。惣身が黒くなって、当時は木の腐った匂いがし、肉を爪または尖った木など突いてみても、一向に跡がつかないそうで、形、肉、色の様子は見分けも付かないと聞いた。<sup>32</sup>

たいへん気味の悪い話だが怪談ではない。こういう事は土地の乾燥状態や例年と違う異常な天候によって十分起こりえることである。シルクロードのタリム盆地の美人のミイラは3800年昔に生きていた女性だが生前の美しさを思わせる容貌をとどめていて、長いまつ毛が残っている。土地が十分乾燥していたからほとんど完全な形で残っているのである。源内の墓地も乾燥していたのだろう。

つねのミイラはあまりにも微に入り細にわたって描写してあるのが有難くない。いい加減でやめてほしくなる。著者の旺盛な科学的精神はさすが幕末で人々が事物や現象を以前より詳しく観察し、情報を記録するようになっていたことを実感させられる。しかしその座像の身長が一尺八寸というのは二十六歳の病死の女にしてはずいぶん縮み過ぎてはいないだろうか。人間の遺体が乾燥した土地ではどの位縮む物なのを知らないので何とも言えないが。

今は土地の払底から土葬埋葬などということがだんだん少なくなって日本でも欧米でも火葬にする人が多い。現代人のセンシビリティに応じた葬送のしかただと甚だ有難く思う。

## 小娘の忠心

明和六年(1769)六月十一日の出来事である。若狭の西津村生まれのつなという十四才ばかりの娘が、近村小松原の茂太夫という人の可愛がっている子供の子守りをしていた。その日夕方外に出て主人の子供を背中に負って遠近歩き回っていたとき、病気で狂気になっている犬が走って来ておぶっている子供に食いつこうとした。とっさのことで逃げることもできず、つなは素早く主人の子を前に抱きまわ

<sup>31</sup> 甲子夜話続編 2:106-107。

<sup>32</sup> 宮川舎漫筆 pp.285-286。

して懐にかくしながら腹這いに伏した。犬は思うままにこの少女の腿や腹を食い漁り、さらに食いつこうとする所に人々が集まって犬を打ちこらしたので犬は逃げて行った。

少女は抱えられて主人の家まで運ばれたがたいへんに痛めつけられて苦しそうだった。一体この赤ん坊をどうして助けたのかと聞くと、きれぎれに、私が此のお家に雇われて来るとき、親が御主人のお愛子を抱き守るのだから、ただ心から仕えなさいと言ったことを毎日守って来ましたが、急なことだったので、私が代わって犬に食べられようと思ったのではないけれど、ただ懐にかくせば過ちはないだろうと思っただけです、と答えた。

つなは間もなく発熱して苦しんでいるので主人は人を故郷へやっけて親にしらせた。母親がやって来たが自分の娘の容態は聞かずに「御子様はどうなさいましたか、娘は過ちは犯しませんでしたか」と聞いたのは全く立派なことだった。それから医者も来て落度なく手当をしたが、つなは回復せず秋になってついに亡くなった。主人も我が子の恩人なので手厚く葬ったが、國の領主がそのことを聞いて比類のない美談だと言い、今年の六月その葬所を改め、大路のそばにある西徳寺という寺の、よく見える場所に高い墓を建て忠誠な所行の顛末を委しく書かせた。また小松原は住居税を長く免じられ、寺はその墓所を朝夕掃き清めるようにと言いつけられ、銀五枚を下賜された。<sup>33</sup>

つなが死んでしまったのは犬がやはり狂犬病だったからだろう。狂犬病の犬は普通気違いのように暴れ回り人に噛みつく。噛まれた人間は発熱しけいれんを起こしたり暴れ回ったりする。唾が異常に出て来て咽頭部から食道近くまで痙攣や麻痺を起こし、非常に咽が渴いているのに液体を飲む事ができない。窒息、疲労、あるいは全身麻痺によって三日から十日の内に死んでしまうのである。この少女の症状は書いてないが多分その状態で亡くなったのだろう。いたましいことである。

それにしても少女の身で犬にひどく噛み付かれるのをよく我慢したものである。封建時代の人間は誰もがそうではなかったが、此の母親といい娘といい、人によっては呆れるほどの絶対的な忠義心を持っていたものである。その主人にそれだけ世話になっていたのでもなく、たいした給料をもらっているわけでも契約にしばられているわけでもない。ただ主人と使用人という関係と階級差がただちにそのような相関関係を作り上げ自動的にその倫理意識が形成されてそれに従っただけなのだろう。

こんな忠義心は日本だけではなく十九世紀まではヨーロッパにも(とくにイギリス)あったようであるがアメリカにはない。

しかし忠義心や特別の愛情からでなく、ただ人間として広い人間愛からそんな風に人を保護しようとして死んだ人は居る。近年の話だがアリゾナで二十二歳の男性が国会下院の女性議員を殺す為に襲撃した時、近くにいた国家裁判所の判事が議員を守るためにかわりに殺された。瞬間的に本能的にその議員を体でかばって弾丸を受けたのである。そういう人もいるのだがこれは忠義心とは全然関係ない。ただ人間として立派な人だったのだとしか考えられない。人道主義の遵奉者は多いが急な時にそのような行動の出来る人は少ないだろう。

## 勤勉男を救った少女

武蔵の熊谷にある農夫が母と妻と暮らしていたが、年来貧しく田地も質に入れ借金は増えるばかりだった。そこで彼は妻に言った。「このままで一家滅亡するよりは私が江戸に移ぎに出てどんな奉公でもして三四年働けば金もできるだろう。それから帰って田地も取り戻せば普通に暮らせるようになるだろう。それまで艱難に耐えて母の面倒を見てくれないか。」

そうして彼は江戸に発ったが、その夜桶川に泊ろうとすると一人旅なので駅ではとめてくれず、ようよう町はずれの百姓家でわけを言って泊めてもらった。その家は夫婦と十二三の女の子だけだったが、その少女が非常に伶俐で、旅人をいたわり夜具食事のことも真心をもって世話してくれたので、此の男は紙に二百文包んで少女の優しいもてなしをねんごろに感謝した。百姓夫婦は固く断ったけれども男は娘の親切に深く感じたのでそれを言って無理に承諾させた。

此の男は江戸に着いて、新吉原の丁字屋で煮炊き奉公人を探していると聞いて、一年の給金二両の契約で雇われた。彼は律儀一本に誠心誠意働き、給金はみだりに使わず、つてを求めては田舎に送り、

<sup>33</sup> 折々草、 p. 50-51。

店では台所だけでなく、朝夕米薪肴酒醤油などの事全部に気をつけ、粗相は全くなかったので、主人以下誰もがあれほどよい奉公人はいないと喜んだ。そのうちに事務一般、二階の事、会計の事、茶屋との交渉も全部立派になし遂げるようになったので、ますます褒められ、給金も増し、遊客遊女にも信用され目をかけられて、六年ばかりの間に金子百七十両ほど蓄える事ができた。

百姓は今是在所の借金も返す事ができ、母や妻を安心させることができると思って一日も早く帰郷したかったが、彼は丁字屋一の働き手で今更暇を願ってもとてもやめさせてはくれないだろうと思い、主人に一時の休暇を願って家族を安心させ在所の質田地を受け返したいと申し出た。主人ももっともな願いだと聞いてくれた。主人はそのほかいろいろと出立の世話をし、飛脚に荷物を先に送らせるなど、手配してくれた。

帰郷の日男は大事の金子を肌につけて新吉原を出たが、板橋の付近から怪しい男が先になり後になりついて来た。茶屋に入れば同じく入り、酒を飲めば同じく、小便する時も少しも離れずつきまとうので、気味悪く何とかして逃れようと思い、ある所で便所へ行くと見せかけて裏から逃れようやく桶川に着いた。しかしここでも夜更けてから門を叩く男がいた。「今夜此所に泊った旅人がいるだろう。その男に用がある、開けてくれ」と無理に入って来た男を隙間から見るとやはり昼間の盗人だった。百姓は身の毛もよだつ思いだった。

この駅舎に二十たらずの優しい女がいて宵からいろいろ世話をしてくれたが、百姓に向かって「あなたはどこかでお見かけしたように思いますが何処の方でしょうか」と聞いた。男もそう言われればその顔に覚えがあるようだった。女が又言った。「六年前頃あなたは此の宿はずれの家にお泊まりになりませんでしたか。」そう言われて男はさてはあの時の可愛らしい娘だったと思って今なぜ此所にいるのかと聞くと、両親も亡くなり、此の家に雇われて働いているのだと説明した。さてさて縁があればこそ二度会えたのだと言って、百姓は自分が今面している難儀について語った。

すると女は「あの盗人は此の街道に名前の聞こえたあぶれもので、こんなことは度々ありました。それをうるさいと言って追い出せば必ずその仕返しをします。とにかくあなたがお金を持っていらっしゃれば命もあぶないことです。これは私を信用していただければの事ですが、お金を私にしばらく御預けになって、今晚遅く此所を逃げて家へお帰りなさい。お金をお預けになるについては外に証拠に取っていただく物はこれくらいしかありませんけれど」と言って頭にさしていた櫛を差し出した。此の櫛を持って来て下されば必ずお金をお返しします。たとえご自分でなくて人をお使いによこされても、此の櫛を持って来ていただければ必ずお返しします」と約束した。

男は喜んで肌につけた金を女に渡しその櫛を懐深く納めた。その後女がいうには「勝手の方へ明日の朝六時に発つから、と言ってお置きなさいませ、そうしてご自分はこの家の後ろの道から竹やぶを伝ってお逃げなさい。その時私は家の裏口を開けてさしあげます」と言った。男はいわれた通り「明日の朝は六時の出発だ」と帳場に声高に言って寝についたけれども中々眠れるものではなかった。女は朝の四時頃にこっそりやって来て合図し、裏の戸を開けて押し出してくれた。男はその日は休む暇もなく急いで田舎へ帰って来た。荷物を先に送った事だし、皆待っていて喜んでくれた。村の人たちも代わる代わるやって来て無事を喜んでくれた。

男は母と妻に江戸で働いて金ができたこと、旅先で起ったこと、娘が櫛をくれて金を預けた事など話し、その櫛は金の保証なのだから今夜は神棚に納めておいて明日誰か親しい人に金を取りに行ってもらおう。と言ったので母も妻も喜ぶ事限りなかった。

しかし翌朝早く起きて急いで人を雇って宿へ金を受け取りにやろうとすると、夕べ櫛を上げておいた神棚に櫛がない。びっくり仰天して、鼠にでもとられたかと探しまわったけれどもどこにもない。男は櫛がなくても女は自分を知っているのだから自分で行って話せば金は渡すだろうと思って、三人の知人に同道を頼んでその日の夕方桶川へ行った。

そこで女に櫛が紛失したことを説明し、面目ないけれど櫛がなくても金を渡してもらえるだろうと思って来た、という女は不思議そうに、その金はさっきあなたからのお使いと言って人が来られ、委しい口上なので信用してお渡ししました。くれぐれも厚いお礼を言われこの金は早速あなたにお渡しすると言っていました、と櫛を出してみせた。男が大いに驚いて深く当惑していると女は、

「私を確かな者だと信用して下さって多くの金を預けられる程だからこんな事があるとはどうしてもわかりません。又私が嘘を言っているとお思いになっても困ります。全く此のお金の事は気をつけて私は此の家の主人にも一言も言っていない。これは心をしずめてよく考えて対処しましょう。もし私の考えを取り上げて下さったらお金が返って来るかもしれません」と言った。



男は何ともしようがなく途方にくれていたのが彼女の考えを述べるように頼んだ。女は「家へお帰りになっても必ず騒いだりとまどったりする様子を外の人に見せないで下さい。しばらくしてから江戸から無事に帰って来たお祝いだと言って村の人々に酒を振る舞い蕎麦でも注文して村中の人たちを招いて下さい。そうして私にも来るようにひそかに知らせて下さい。私の櫛と引き換えにお金を取って行った人の顔はよく覚えていますから、その日に来る人たちのなかに見つかるかもしれません。これは必ず他所の人の仕業ではなく村の人のやったことです」といった。男もその道理に感心して明るく日村へ帰って平気を装い、其の後一二日して村へ礼に行き酒の振る舞いのことを村中に知らせた。

その日が来ると名主をはじめ村中の人々がのこらずやって来た。挨拶が終わってご馳走が始まり宴が半分も過ぎて燈がついた頃、桶川から台所に来ていた女が障子の破れから座中の人々を見終わり、密かに此の男に話した。「この間櫛を持って金を受け取りに来た人が座敷にいます。上客の次ぎにいる人です」と言うのを見ると名主の息子だった。余りに意外なので此の席でそれを言い出すのもどうかとためらっていると、女は、

「いいえ、今の機会をのがせばもう後で正す証拠は出ません。今すぐにそこへ行ってあの男を捕らえて事の次第を述べて下さい。その男が白状しなかったら私が出て来て証言します、」と言った。それで男は座敷へ出て行って一同の前で話し始めた。

「皆さんよく聞いて下さい。私は六年間江戸で奉公し金子を百七十両ためてこんど持って帰りましたが、途中盗人につけられたので、桶川宿の女に金を預けて証拠に櫛を受け取って金子との引き換えを約束して来ました。するとその櫛が夜のうちに無くなったので桶川へ行って聞いた所、私より先に櫛を持参して金を受け取った人がいたそうです。誰かと思ったらそれがこの名主どのの子息だったのです。」

そういうと名主は大変に怒って「私の家系は代々名主を此の村で勤めている。それを証拠もなく倅が盗人だなどといわれては許せない」と息巻いた。その子供も立腹して無実を言い立て堪忍なりがたいと言ったので、一座はしらけて酒興もさめはてた。

そこで男は桶川の女がここに来ていることを言って呼び出して名主の息子に会わせると女が「絶対に間違いありません。櫛を持って来て金と引き換えて取って行ったのはこの人です。私は顔をはっきり覚えています」と証言した。

名主は「そんな確かな証拠があるのなら家に帰って息子の持ち物を調べてみよう。それまでみんな絶対に動かないでくれ、息子も帰さないでくれ」と言って帰っていったが暫くして立ち戻った。

「誠に面目次第もないことだが帰宅して倅の道具を調べた所、箆の底にたしかにこの金子がありました。果していわれる通り百七十両ありました。不届き至極な事です」と言って財布を出して亭主に渡した。

やがて此の名主の息子がその座を立つと見えたがどこかへ消えてしまった。それと一緒に勝手にいた百姓の妻も消え失せてしまったと皆が騒ぎ出した。これを聞いて村の人が言った。

「今まで黙っていたけれど、今は申しませう。此の家の主人が江戸へ行ってから六年の間名主殿の息子と此の家の妻女は懇ろになって、目に余る状態でした。誰も知らぬ者はなかったけれども今日まで黙っていました。こんなことで櫛が無くなったのも説明がつきます。」

こうして人々が帰って行ったあと男はやもめになってしまった。母も年を取っているのに介抱する人もいない。幸いあの桶川の若い女は利口な上にこれまで二度会った縁があるので、年はずいぶん違っているけれど、此の女を妻に迎えると良い、と人々がすすめて取り持ってくれ、男はついにその女を貰い受けて夫婦になったということである。<sup>34</sup>

これはなかなか内容の多い劇的な噂話である。津村淙庵は元文元年(1736)-文化三年(1806)の町人文人国学者で、その生涯を通じて見聞したことを四十歳ころから書き始め湛海(譚海)十五卷十五冊の随筆集を書いた人である。作家ではなかったから、多少の粉飾はあったかもしれないが作り話ではないだろう。

とにかく正直で働き者の年配の男を、賢い少女が助けてめでたくその困難から救い出す美談をどこかで聞いたのだろう。筋書きは三部からなっていて、始めは貧困から江戸へ働きに出て勤勉に働き続けて当時にしては相当の大金をためたという話、二番めは故郷への帰り途、胡麻の蠅につきまといわれて苦労し、昔少女だったころに会った若い女に助けられて無事に帰宅した話、三番目は帰国してから、女

<sup>34</sup> 譚海、p. 209-216。

に預けて来た金を誰かに取られてそれを取り返すまでの劇的な話である。二部の泥棒は関係がないようだけれども、その悪者がいなければ最後の災難は起らなかったわけだからやはり大切な部分である。

どちらにしても若い女の行き届いた旅人の扱い、落ち着いて道理に沿った考え方などは当時の普通の若い女性には珍しい資質である。主人公も妻や年老いた母を残して六年間誠心誠意働き続けたような男性だから平凡な男ではない。しかし村での酒盛りの時に対決した村の名主も、息子の犯した罪をみとめて謝ったのだから中々平凡な男ではない。やはり代々名主を務めて来た家の責任ある人物の言動である。だからこの話は後味よく終わっている。不倫関係の二人が逃げてしまったことなどどうでもいい。

## 八丈島の女たち

松浦静山公は佃の海上で花火があった日に鉄砲州の市楼(塔)に登って見た。途中の町家のあちこちに荷車が止まっていて婦女子が四五人立っていたが、その中の二人の異様さが静山公の目を引いた。一人は年の頃二十ばかり、もう一人は十六七の娘達だったが、非常に青ざめた顔色に髪は油をつけたこともなさそうに見えるぱさぱさ髪だった。鬘はてっぺんにあったが、その大きさは長さが七、八寸、廻りが一尺余もあるかと思える一種の島田鬘なのだった。青い木綿の着物を着て狭い帯をくびれるようにしめていた。駕籠脇の者にあの女は八丈人かどうか訊かせると果してそうだった。

静山公は塔に着くとその女たちを呼ばせたが来なかった。彼は八丈島の事を親しく聞き、女たちの様子もよく見て、随行の女たちにも島の女たちをよく見せようと思ったのだ。

この女たちは伊勢屋という宿に寄寓していた。父親が昔八丈島に流され、島にいる間に娘たちが生まれたのだそうである。この度赦されて一昨日帰って来たが、父の願いによって娘達は始めて江戸を見に来たのだった。静山公はますますよく見たくて手を尽くし、宿の内儀も来るように勧めたのだが女たちは来なかった。後には町役人を通じて招いたのだがますます頑固に来なかった。

實は島を出るとき、江戸で島の様子を話せば恥になるからしゃべらないようにと厳しく指示されたのだそうである。女たちの名前や年を家来に訊かせると、長女は二十で名はニヨコ、次女は十八でナカ、三女は見えなかったのだが九歳でテゴというのだそうである。静山公が既に読んでいた『七島日記』にテゴというのは八丈島ではごく通常の名だと書いてあった。三人とも今は改名して、きし、なか、くの、と名乗っているそうだった。

本によれば八丈島の女の髪は長くて六尺三寸もある者がいるそうなので、翌日又人をやって髪毛を少し請うと切ってよこした。長女のは長さ三尺三寸五分、次女は二尺七寸八分、三女は禿なので髪をよこさなかったから長さはわからなかった。

その日静山公の外出中に、町役人がその島女たちを連れて静山公を宿のあたりで方々探したそうだが彼は夕方まで帰って来なかったので会えなかった。役人が謝礼物をあてにしていたのかどうかかわらないが、どっちにしても静山公は島の女たちとは縁がないようだった。

彼が讀んだ『七島日記』によると、八丈島は女が多いので男が色欲にふけることが甚だしいという。非常な祖食で心配事は多いのだが、身体は健康で色欲の害はあまりないということだった。昔女護ヶ島と伝えられたのは八丈島のことである。女は操正しく不義淫行を恥じる。又夫以外の男との情事はめったにない。他の女たちは淫行不義を犯したような女とはつきあわない。女が夫の不義を正す事は内地で男が女を制するのと同じようである。夫は不義をすればたいへんつらい目にあわされるそう。昔女護ヶ島に男がはじめて渡ったときからの遺風だろうか。

島人は外観は皆若くて五十歳の者も四十以下に見えると言う。今でも生まれる子供は女が多くて女はだいたい美しいが距離が遠いせいか風俗は内地とおおいに違う。言葉の声音は異常で、眼の光りも少し違う。質朴で偽りや飾りが無い。女はまだらと言って非常に長い単衣を着る。帯は内地のように広いのは用いない。すべて蘇芳染のしごき帯である。静山公が以前島の流人を見た経験によると、大方はやせ衰え色青ざめてこの世の人とは思えない程で非常にあわれであったと書いている。<sup>35</sup>

静山公は色んな事とめどなく並べ立て、言っている事があちこち矛盾して少し支離滅裂のようである。顔の青白いこの世の者とも思えないような女たちを見てもっと彼女等を知りたいと言う。八丈の女は大体美しいと聞いていたからだろうか？女性には貞潔だと言うかと思うと島に女が多いから色欲にふける事が甚だしいと言う。矛盾するから「男」と言う字を入れておいた。女が多いから男だけが色欲

<sup>35</sup> 甲子夜話続編 2: 12-14。

にふけるのだろうか。しかし男も相手がなければ色事はできないだろう。結婚している男が不義をすると妻からひどい眼にあわされるし、不義をした女は村八分にされるのだったら、色欲にふけるのは未婚の男女が多いということだろうか。そうしてその人たちが健康で女は大体美しいのならば、やせ衰えて色青ざめた八丈人は罪人だけなのだろうか。静山公が見た少女たちも非常に青ざめていたそうだが、その原因は何なのだろうか。

多分『七島日記』という本に触発されたのであろうが静山公は非常に八丈島の女に興味をもってしつこく彼女らを召し出そうとしたが結局「縁がない」とあきらめざるを得なかった。彼の態度は命令的ですこし人種的偏見を持って居るのではないかと思われる位だが、それは彼の場合、階級的な偏見で人種的偏見ではないだろう。外国からの情報に非常に興味を示した人であったから、此の場合にも『七島日記』に書いてあった事が本当かどうか調べただけかもしれない。とにかく八丈島の女性たちにこれほど熱心な興味を示しているのは面白いと思うし、江戸時代も後期は知識人の外部社会への見方が江戸初期とずいぶん変わって来ているのがわかる。

### 肥前 野茂崎の女性

長崎から三里、南海のほとりに野茂崎という所がある。その地の女性は男子以上に男の仕事に励む。先ず田圃を耕す力は男子に勝っている。著者の佐藤成裕は始めは疑っていたが、婦人達は本当に男子と同じほど力がある事を納得した。そこでは女性が皆田畑の耕作を自分たちの仕事と心得て男子に耕作をさせない。男子はみな漁業専門で、田畑に出る事はないから田畑の仕事は女子より下手なのである。

これらの女性は顔は黒く手足も男のように見える。前に三徳という木綿の三布をつけて腰巻きのかわりにしているが、それは前垂や手拭の役目もする。その色は全部紺色で他の色は使わない。これを細帯にはさんでいるだけで、腿まで出して薪を負い石をかつぐ風はすこしも女らしくないが、なれているので恥じる様子もない。男子に勝つことを奨励しているのである。此の土地は甚だ貧しいので少しでも習慣を変えると困ることになるそうで、ここではこんな風儀は珍しくないという。<sup>36</sup>

またもや男よりも優れた女たちの話である。しかもこれは個人ではなくその地方全体の特徴だという。男は漁業、女は農業、とはっきりとした分業なので男には田畑の仕事はできない。女は真っ黒になって働いて男のようになっても別に結婚生活に問題はなさそうだ。女がみんなそんな風だからだろう。男に勝つ事が当たり前なので、もし夫が売娼婦などにうつつを抜かす事があれば夫などぶんどんで追出してしまうだろう。勇ましいことである。

### 姥ヶ餅

左近将監乗邑(松平乗邑、吉宗將軍の老中)が江戸幕府の若年寄になって次第に権力が伸びていた頃、都へ行く途中近江の草津を通った。ここの姥ヶ餅の茶屋というのは昔から名高い家なのでそこに寄って旅の疲れを少しやすめた。内から老女が出て来たのを見ると年は七十近く、腰は海老のようにかがまり、黒い顔に白い髪がまつわっているのを片手でかきあげている。それが汚らしい上に欠け損じた高つきに餅を盛って捧げて出した。「その餅はきれいなのか」と左近将監が思わず問うと、媼は顔をふり上げて「殿様は目をふさいで召し上がれ。世の中になんで汚ないものがありましょ。あまり深くおしらべになればきれいだと言えるものは何にもないでしょうよ」と言ったので、「賤しい老婆だけれどもかしこく私を諫めたなあ」と感心なされたそうだ。<sup>37</sup>

この姥が餅の老婆が言ったことは本当である。現代は誰もが衛生に敏感になっていて手を五分毎に洗ったり部屋に入る度に殺菌剤で手を消毒するのが常識になっている。それはまだいいが、バイキンを怖れて絶対に人と握手しない、とかレストランのキッチンで何をしているかわからないから絶対に外食しない、というような人もざらにいる。それほど神経をたてていたらかえって自然の抗菌作用を妨げ

<sup>36</sup> 中陵漫録、p. 336-337。

<sup>37</sup> 落栗物語、p. 135-136。

ることになって人間の抵抗力が低下するのではないかと思うほどである。以前抗菌力が全然ないために風船の中に住んでいた男の子がいた。そんな人は人間として生活できない。「あまり深くお考えになればきれいだと言えるものは何にもないでしょうよ」という言葉は真理を含んでいるがそれを受け入れた左近将監も賢明であった。

### 下女の歯

江戸の神田の飯室某という人の家の台所に、田舎者だが心のよい水仕事をする下女がいた。ある時、外から女客が来て女主人にこう話していた。「夕べ歯が欠けた夢を見てほんとうに気持ちが悪うございました。」すると女主人が「歯が欠けた夢を見た時には、すぐに櫛の歯を欠いて捨てれば何もおこらないですよ。これは昔からの習慣だそうです」と教えたので「それじゃあすぐにそうしましょう」と女客は喜んで帰って行った。その話を山出し下女が聞いていたが、ある夜櫛の歯がかけた夢を見たので驚いて、目がさめてからすぐに自分の前歯を一枚ぶっ欠いてすてたそうである。思い違いが大変おかしかった。<sup>38</sup>

これは本当の話だろう。毎日起っている何でもないことからこんな知識の混乱が生まれるなどは普通の人なら想像もしないだろうから。しかし歯が欠けたとか抜けたとかいう夢はその心配が潜在して見ている夢だろうから、その話をした客は若い人ではないだろう。一方櫛の歯がかけるなどという夢はめったに見るものではないだろう。だからそれが起ったとき、女中は聴いた話の生覚えの部分を実行した。全くの思い違いだが若い女中は客と女主人の話からかなり強い刺激を受けたらしい。江戸時代の心配の種は比較的単純でナイーブな事柄だったのだろう。若い女が歯を自分で欠いてしまったらもう生えて来ない。気の毒な結果になったものである。

### 女の墮胎医

難波に子供をおろす女医がいた。たいへん長い間同じ家に住んでいたのだが、亡くなった後、子供も跡継ぎもいなかったので、家は空家になって荒れ果てていた。ある人がその土地を買って家を崩し地を掘って改築しようとした。穴を掘った時何か固いものがあって鍬に固く当たった。調べてみると古い備前焼の壺で封印がしてあった。開けてみると多くの金が出て来たので早速お役所に届けた。後にお役所に呼び出されて、地主は全部の金の半分、のこり半分はその日の日雇い男五、六人に分けて与えられた。全部で二百七十両ほどあったそうだ。

また難波村の畑の中で売娼婦が足を踏み外して転んだが、そこに穴があって、中にキラキラ光るものがあつたので拾ってみると十両ばかりの金だった。人々が聞いてその場所へ行って更に掘ってみると全部で大体二百両も出て来たそうである。これも公に訴え出て、後に拾った者たちは自分で掘り出した高を与えられたそうである。売娼婦は自分の体を買戻して親のもとに帰ったという。<sup>39</sup>

女医者のも、売娼婦のも少しも正体はわからない。特に、女の墮胎医者というのはその時代珍しかったのではないか。それとも医者とは呼べない教育も訓練もない、普通の取り上げ婆の事だったかも知れない。どちらにしても、もう少しその女性の事が知りたいのだが情報はない。この女性は多くの妊娠して困っている女たちに墮胎させて相当な金を儲けたと見える。しかしそれを使わないで壺の中に封じ込んでいたというのはどういうわけだろうか。泥棒に取られないようにかくしたのはわかるが、それを遺産として残す子供も親類もないのに使わないで隠匿したというのは事情がありそうである。しかしこれはただの噂話だからそこで止まったままである。娼婦の方は、たまたまそこを歩いてつまづいたのが女だったと言うだけで別に意味はない。

<sup>38</sup> 猿著聞集、p. 435-436。

<sup>39</sup> 胆大小心録、p. 407。

## 鬼になった女

房州の農夫の妻が鬼になって夫を食い殺し、出奔して相模に着いた。小坪の光明寺であちこちの人家を襲って驚かし、墓地へ行って死者を三人まで喰った。それから雪の下に走って行ったので、大蔵大町、小町、柄柄、二階堂、宅間、小袋谷、建長寺前の十二坊など、のこらず門戸を閉ざして、太鼓を打ち鳴らし、拍子木を打って、その音は響き渡って今にも敵の大軍が由比ヶ浜に打ち寄せるかのような大騒ぎになった。けれども誰一人その鬼女を退治に出ようという者はいなかったもので、薄暮から暁天まで、狂婦は狂い廻ったのだが、何処へ行ったのか、跡形もなくなったそうである。これは七月初旬に大山参詣をした人がその辺で聞いて来た話である。<sup>40</sup>

## 夫殺し百姓女二人

上州利根郡の百姓孫兵衛の妻、るか、二十六歳、は密通していることを夫に見つけられて、孫兵衛にさんざん打擲されたので、蠅取りの毒薬で夫を殺すことを謀り、二度ほど食物に混ぜて食べさせたところ、おおいに吐逆したが、死なずに病気になるまで床についた。

悩んだるかはそのことを同村の専蔵の女房、しか、二十歳、に打ち明けると、彼女も密夫を持っているのを専蔵に見つけられて苛まれたので、自分もその薬が欲しいとるかに頼んで分けて貰った。蠅取り薬を専蔵に飲ませたが何の効果も出なかったので、薬を買って余分に飲ませたところ吐逆して非常に苦しんだ。そこでしかは村の医師東益を夜中に迎えに行き、一緒に来てもらう途中、医者が彼女を抱きとめて言い寄ったので、その場を逃れるため、夫がそのような状態だから、毒薬を飲んで死んでしまえば承知しよう、と医者に言うと、毒薬を調合することを約束したのでしかは承諾した。その後医者から薬を受け取った。それは使わなかったが、専蔵はすでに蠅取り薬を多量に飲んでいたので吐血して死亡した。

二人の女は申し合わせて剃髪して逃げた。しかは遠州あたりの尼寺にかくれていた所を捕らえられた。二人とも不屈き極まるとして引き廻しの上、獄門磔になった。<sup>41</sup>

この鬼になった女と夫を殺した女と言うのは特別な悪女の例であるが、始めの夫を喰い殺したとか死体を三体食べたというのはあまりにも異常で狂人としても全く例がないか、あっても非常に稀な症状だろう。これはもう人間の行動ではないから何とも言い難い。もしその話が本当だとすると、それまでに何かその前兆とかその最終的な乱行を暗示するような行動があったはずである。そうしてその極点に行き着く発火点になった動機が何かあったはずである。と言って医学の発達していなかった時代の農村でどんな方法で予防できたかわからないのでこんな事を言っても無駄である。

夫の毒薬殺しの方はあまりにも幼稚で考えの足りない女たちで、信じ難いが、今日でも動転して理性を失った人間は信じ難いことをするから、時代や地域や教育や年齢とは別に関係ないかも知れない。るかの夫は死ななかったかも知れないが、彼女はしかよりも年長であり、しかも毒薬殺しの動機と方法を与えたので同様に罪は重い。彼女たちの密通の相手はこの話に少しも出て来ないが、殺人の後に二人ともさっさと剃髪したのを見ると別に恋人たちを深く愛していたわけではなかったのかも知れない。二人とも非常に若く、何らかの自由を求めていたのだろう。しかし夫に殴られたからといってそれが殺人に直結したのはその頃の女性としては過激すぎて理解に苦しむ。

<sup>40</sup> 甲子夜話 4、p. 23。

<sup>41</sup> 甲子夜話続篇 3、pp. 102-103。